

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1918年11月	坂口五峰	北越詩話・上	単著	(目黒甚七・目黒十郎刊)	安吾の父五峰こと坂口仁一郎が30年の歳月をかけて調査・執筆した、新潟の漢詩人たちの人と作品を紹介・集成する大著。下巻は1919年3月刊。仁一郎の曾祖父・文仲が良寛と交流したエピソードを記す巻五「坂口寿庵」のみ『坂口安吾全集』別巻(筑摩書房 2012)に再録	
1929年6月	広井一	明治大正 北越偉人の片鱗	単著	(北越新報社刊)	仁一郎の友人でもあった政治家・実業家による新潟の偉人紹介本で、「坂口仁一郎氏」の章は『坂口安吾全集』別巻に再録	
1929年11月	坂口献吉(編)	五峰余影	共著	(新潟新聞社刊)	仁一郎の追悼録として長男献吉が編集・刊行したもので、安吾もこれを熟読し「石の思ひ」などを書いた。各界の著名人が綴る回想文から、業績だけでなくとどまらない生きた仁一郎の姿が浮かび上がる	
1931年7月	牧野信一	「風博士」	紙誌	文藝春秋付録 「別冊文壇ユウモア」	「風博士」について「厭世の偏奇境(パロク)から発酵したとてつもないおしやべり(アストラカン)です。これを読んで憤(おこ)らうつつで憤れる筈もありますまいし、笑ふには少々馬鹿馬鹿し過ぎて、さて何としたものかと首をかしげさせられながら、だんだん読んで行くと重たい笑素に襲はれます」と独特な表現で絶讃、安吾の文壇デビューを後押しした。『坂口安吾研究』I(冬樹社 1972)、『文芸読本 坂口安吾』(河出書房新社 1978)、『坂口安吾選集』1(講談社 1982)に収録	風博士
1931年8月	白旗武	ヴェニス提灯	紙誌	今日の詩	「風博士」のユニークさよりも「黒谷村」の「ヴェニス提灯にも似た人情の灯を愛する」と批評。著者は『青い馬』同人。『安吾通信vol.1』(関井光男発行 1983)に発表月とタイトル誤記で収録	黒谷村
1931年8月	牧野信一	真夏の夜の夢(下)	紙誌	時事新報(23日)	「黒谷村」を傑作に挙げ、「極まりなき風景の、冷々と澄み渡つた霞を透して動く人物の姿が、得難きプリズム望遠鏡のレンズに映り出て手にとる如く浮んで来る。貴く、面白く、波めども尽きぬ芳ばしい詩魂に満ち溢れてゐる」と絶讃、「私は今、この作家が次々に描き出すであらう稀有な詩境の「パノラマ」を熱心に待ちつゝある者だ」と締めくくる。『坂口安吾研究』Iに日付誤記で収録	黒谷村
1931年10月	龍胆寺雄	九月雑誌作品評	紙誌	新潮	「海の霧」を1931年9月の秀作短篇に数え、文章上の難はあっても「一つの驚異を提出した作品」であり「一人の人間の靈魂が、かくまでも注意深く内省され、かくまでも精細に表現され得る場合は少ない。しかも独特な角度と表現とをもつて。単純な風景の描写さへこの作者のブラッシュにかかると、不思議な個性をもつて生き生きと浮き彫られて来る。躊躇なくこの技術は讃歎してもいい」と評価。『坂口安吾全集』1(筑摩書房 1999)解題に引用	海の霧
1931年10月	川端康成	文芸月評	紙誌	中央公論	「海の霧」について「未成品である」と一言で切り捨て。川端康成『文芸時評』(講談社文芸文庫 2003)に収録	海の霧
1931年11月	北原武夫	十月の作品—坂口安吾氏の「竹藪の家」	紙誌	新三田派	「風博士」で「あまりに豪壮な坂口氏の才能が僕らを圧倒したと絶讃し、「黒谷村」で僕らを酔はした缥缈とした愛情の世界は、「竹藪の家」に至つて遂に蒼茫とした人生の地平線に這入つてゐる」と最高度の評価を与え、宇野浩二に比すべき作家とする。また、「山下三郎が仏蘭西に出発する前々日、山下の家で」安吾や田村泰次郎、本多信らと同席したと書かれている。『安吾通信vol.1』に収録。『坂口安吾全集』1の解題にほぼ全文引用	風博士 黒谷村 竹藪の家
1931年11月	今日出海	文芸時評—坂口安吾氏とアテネ学派	紙誌	作品	「霧博士の廃類」について「『風博士』を読んで「作品」所載の「霧博士」へ移ると氏は書き過ぎによる混乱以外に、氏自身の動揺が見える」とやや否定的ながら、「氏の現実を逃避した夢の追求である」として、牧野信一のギリシャ幻想を交えた作風との類似を指摘。また、「海の霧」に見られる「憂鬱な近代風景画家としての手腕」を賞め、「鋭敏な繊細な若々しい感情が、もろく見えるのだが」「このもろさは若さであつて僕にはこの作品が最も素直で、美しかった」と評価。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾選集』1(講談社 1982)、『坂口安吾全集』別巻に収録	霧博士の廃類
1931年12月	宇野浩二	1年の清算—1.本年度下半期の傑作 2.来年度に活躍を予想される新人	紙誌	時事新報(14日)	1の回答で「夜明け前」「盲目物語」「パラダ物語」「つゆのあとさき」などとともに「竹藪の家」を傑作として挙げ、2では「読んでゐないので、答へられぬ、前記坂口安吾がどうか」と記す	竹藪の家
1932年1月	中戸川吉二	文芸時評	紙誌	文藝春秋	「竹藪の家」と「黒谷村」を牧野信一の薦めで読み、「流行作家の一人」になりうる「めずらしい素質を持った作家だ」と認める。『坂口安吾研究』Iに収録	黒谷村 竹藪の家
1932年3月	大沢比呂夫	文芸時評	紙誌	青い馬	「蟬」について「この中に描かれてゐる人物は皆歪められて異つた新しい意識と感覚の中に生きてゐる」と述べ、ストーリーや構成、人物のネーミングの旨さを指摘、「深い意識の中の心緒の物語りだ」と評価。「木枯の酒倉から」については理解できないと否定。『坂口安吾研究』Iに発表月誤記で収録	木枯の酒倉から 蟬
1933年7月	牧野信一	「学生警鐘」と風	紙誌	新潮	短篇小説の断章のような作品。途中「僕の知友に、風博士といふ男がある」と書き出し「その男は、まんまと一にぎりの風をつかまへて、風に物を言はせたことがあつたのだが、ちかごろ(中略)どうも辻妻が合はないで白つぽくなつてゐるらしい」と暗に近作批判をこめる。『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』に収録	風博士
1934年6月	阿部知二	文芸時評	紙誌	行動	「姦淫に寄す」について「人間精神といふやうなものの混乱と秩序との相を狙つて」「普通の心理小説を突破しようとしてゐる点で、ラディゲ的なものといふべきであらう」と論評。	姦淫に寄す
1934年9月	井伏鱒二	文芸時評(7)	紙誌	報知新聞(3日)	「麓(戯曲)」が一幕のみで終わっていることに対して「大雑誌は創作欄を拡張しないものか」と苦言を呈している	麓(戯曲)
1934年10月	阿部六郎	文芸時評	紙誌	文藝	「麓(戯曲)」について「旧家の若者達の変に明るい狂燥な不安な空気は出てゐる。人物はシルエットで空気が主人公だ。桜の園の連想がかなり邪魔」と批評。	麓(戯曲)
1934年10月	河上徹太郎	文芸時評—新潮	紙誌	作品	『新潮』9月号の創作欄に載つた安吾の「麓(戯曲)」など4作品について「不幸にして皆愚作である」と一蹴し、「大体何を好んでわざわざ自分と縁遠い世界と取つ組みたがるのだらう」と批評	麓(戯曲)
1934年10月	板垣直子	文芸時評—精神力を失へる文学	紙誌	新潮	「麓(戯曲)」について、「感情の枯死した専門劇作家達のもの」と異なり、青春の感情が溢る許りに流れてゐる」と評価、「人物の性格化といふことは不十分である」としながらも「希望なき人生にも春を予期しないではゐられない」作者の心情に共感を示す。『坂口安吾全集』1の解題に引用	麓(戯曲)
1935年5月	牧野信一	浪漫的月評(3)	紙誌	早稲田文学	旧作5篇の「万華なる佳作」に比べて、最近作の「蒼茫夢」は「どうしたといふのかさつぱり氣勢が挙らないのは愛読者としてまことに心細い次第だ」と批判。『坂口安吾研究』Iに収録	蒼茫夢
1935年6月	牧野信一	坂口安吾君の『黒谷村』を読む	紙誌	新潟新聞(28日&29日夕)	第一作品集『黒谷村』発行を喜び、「得難き読書の快はやはりこの如き純粋なる文学書のなかにこそ、万遍なく求められる」「あれは酒だ、僕は酔はされた」と絶讃。『坂口安吾全集』1の月報に収録	黒谷村

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1935年7月	中島健蔵	個人の歴史に就いて—坂口安吾氏へ返信	紙誌	作品	同誌同号に掲載された安吾の「日本人に就て—中島健蔵氏へ質問」と共に往復書簡の形式で発表された。『坂口安吾研究』Ⅰ、『文芸読本 坂口安吾』に収録	日本人に就て
1935年7月	荒木巍	文芸時評(4)	紙誌	報知新聞(30日)	「逃げたい心」について「我儘な作品」と批判	逃げたい心
1935年9月	古谷綱武	文芸時評	紙誌	作品	「逃げたい心」について「失望した」「ここにあるものは感激のない自己模倣だ。この作品のなかにある唯一の充実したものは、小説を書かずにあはられないといふ作者の主観的論理の情熱だけだ」と批判し、「黒谷村」以降の作品すべてが「黒谷村」の模倣になってしまう「宿命的な文学者であることが、この作家の文筆生活を、たえず苦しめるに違いない」と述べる	逃げたい心
1935年9月	洪川驍	文芸時評	紙誌	文芸首都	「逃げたい心」について「作者の各人物に対する無責任さ」を批判	逃げたい心
1935年9月	正宗白鳥	文芸時評	紙誌	中央公論	「逃げたい心」について「生存そのものにおどおどして何処かへ逃げたくなる気持、そして逃げんとして逃げ得ない有様が、おだやかに書かれてゐる」と評価	逃げたい心
1935年9月	伊藤整	文芸時評	紙誌	文藝	「逃げたい心」について「特殊なスタイルをもって、妙な捕捉しがたい気分を把握した作品」と評価	逃げたい心
1936年4月	山岸外史	坂口安吾君の為めの文章論	紙誌	作品	「狼園」について「ドストエフスキ的ではあるが「その意識過剰性には同時代人として快く共感する」とし、「愛欲の研究といふ小説に対する正攻法」や小説の「真髓性」を持っている点を「力作」として評価する反面、文章は「意識過剰」で「欠陥」があるとした。なお、安吾は山岸への手紙で「狼園」を「千枚以上」の長篇にする予定だと明かしていたという。『坂口安吾研究』Ⅰに収録	狼園
1938年2月	芹澤光治良	小説月評	紙誌	文學界	「女占師の前にて」について「感想を述べたい誘惑を感じる」と評価	女占師の前にて
1938年8月	無署名	吹雪物語(坂口安吾著)	紙誌	中外商業新報(15日)	「芸術の世界から夢幻の要素を排除することは出来ず、現代といふ生きた時代の最も生きた問題は知性の動向である」とし、この「夢と知性に新しい解決を試みる」ことは、つまり「古典と現代生活の融合の道でもある」と述べ、これに挑戦した安吾の「大きな野心」を買っている。2020年に日経新聞社の本多俊介氏が発見した記事	吹雪物語
1938年8月	樽尾好(大井広介)	新刊批判—坂口安吾「吹雪物語」	紙誌	槐	「吹雪物語」の登場人物がみな無気力で虚無的、観念的である点を指摘し、「非常に個性がありながら知性に乏しく、力量がありながら浪費してゐる。一種の地獄である。抜けねばならない」と、むしろ作者へ向けて助言を記す。「しかし、内容への不満は別としてわが文学では珍らしくロマンの正道的な形式をとつてゐて好感をもつたと評価。『坂口安吾研究』Ⅰ、『坂口安吾選集』2(講談社 1983)に収録。『坂口安吾全集』2(筑摩書房 1999)解題に引用	吹雪物語
1938年9月	林芙美子	私の真	紙誌	文芸	新潟紀行エッセイで、「吹雪物語と云ふのを買つたが、新潟の町の姿がよく出てゐて、新潟へ来てこの小説のことを思ひ出した。作中の文字と云ふ女性が、私には興味があつた。白山神社の辺を歩きながら、坂口安吾と吹雪物語をふと思ひ出した。逢つたこともないひとだけれど、作家は作品で知己を得て嬉しいものだと思ふ。」と共感を述べる。林芙美子『心境と風格』(創元社 1939)に収録され、『坂口安吾全集』2(筑摩書房 1999)の解題に引用。初出誌と発表年月日については、日経新聞社の本多俊介氏が2020年に発見した	吹雪物語
1938年9月	小田仁	坂口安吾作「吹雪物語」	紙誌	篋	竹村書房のPR誌なので『吹雪物語』の宣伝も兼ねた文章ではあるが、最近の書き下ろし長篇群の中で最上とし、「ストーリーが面白い、作者の独自の人間観察が面白い、またそこには各人物の性格の創造がある、ここでは作者は人間性格の根本をつき、現代人の皮をはいてゐるのだ、陰鬱な冬の新潟を背景にして展開される現代愛慾物語だ」と絶讃。『坂口安吾全集』2の解題に引用	吹雪物語
1939年11月	林芙美子	心境と風格	単著	(創元社刊)	最終章に『吹雪物語』への共感を語った紀行文「私の真」(1938初出)を収録	吹雪物語
1940年8月	嵯峨傳	創作月評(10月に後篇)	紙誌	新潮	「イノチガケ」について前篇を「徒勞な骨折りと批判、後篇を「印象が鮮明」と評価	イノチガケ
1940年10月	匿名(M・M)	『文学界』『新潮』作品評	紙誌	文藝	「イノチガケ」後篇について「血腥い殉教図を淡々と綴つた前篇の方がまだしも味があつた」と批評	イノチガケ
1941年7月	井上友一郎	坂口安吾著『炉辺夜話集』	紙誌	現代文学	安吾作品には常にその底に「澄明な気持」があり、それが「美しい宝石の象徴を見るやうに、すこぶる落ちついた光を湛へてゐる」と賞讃。作品集の中では「紫大納言」を最も高く評価し、「一種象徴的な或る深いものが感ぜられた」と述べる。また、「イノチガケ」の「まるで木の枝をぼきん、ぼきんと折るやうに一種素つ氣ない文章で」描かれる殉死の記述が「多くの殉教者たちの流転の境涯を暗示するやうで、寒々として面白かつた」と批評。『坂口安吾研究』Ⅰ、『坂口安吾選集』4(講談社 1982)、『坂口安吾全集』3(筑摩書房 1999)月報に収録	紫大納言 イノチガケ
1941年10月	井上友一郎	『河田誠一詩集』について	紙誌	現代文学	『桜』同人たちで「講演と映画の夕」を催した折のエピソードとして「坂口安吾は、酒を一杯ひっかけないと巧く喋れぬ、といふやうなことを云ひ出して、控室でチビリチビリ冷酒をあふつてゐた光景が、いまだに私の臉には鮮かに残つてゐる。数寄屋橋が雨に煙つてゐたこともよく覚えてゐる」とある	
1941年11月	無署名	(コラム)	紙誌	現代文学	安吾が「ウスノロ」ゲームで自分が強いように書いていたことへのギャグ・タッチの反論。それによると、井上友一郎、前田正衛、大井広介、南川潤や、「狡猾トリオ」と呼ばれる稲邊道治、杉山英樹、佐々木基一らが強く、「平野(謙)は大眼玉をギョロつかせ不正を看破しトリオの恐怖的であるがノロく、坂口は遥かにそれ以下である」とこきおろしている	
1942年1月	大井広介	頭脳錬成	紙誌	現代文学	秋に「ウスノロ」大会をやつたところ、上位は宮内寒彌、大井広介、安吾の順になつたとある。また、探偵小説犯人当ての遊びでは、安吾の推理がいちばんひどいそうで「こないだはクリスチイの「三幕の悲劇」といふのをやつた。嫌疑者はタツタ三人の小説だ。私と平野赤木両探偵は犯人あてたが、《これをあてきらぬ奴は、探偵小説の読者たる資格がない》と豪語してゐた坂口探偵は二通りも答案用意しどちらもはづれ」と笑っている	
1942年2月	無署名	坂口安吾「島原の乱(仮題)」上[大観堂「長篇歴史文学叢書」広告]	紙誌	現代文学	「徳川幕府へ最初の反抗ののろしを放ちながら、交易を代償とする憎むべき和蘭の砲撃に、数ヶ村の老若男女が屍を重ねしかも武器に訴へたが故に殉教の徒ともみなされなかつた島原の乱。『文学界』連載『イノチガケ』により切支丹物への抱負の一端を窺はせし惑星坂口安吾が、斬新な人間創造と奔放な設定を駆使し、いまでも期待に応へる会心の傑作。スタンダードを彷彿しメリメの香気高く、まさに歴史文学のジャンルを拡充するもの」とある。安吾自身が書いた広告文とも考えられ、七北数人『評伝坂口安吾』(2002)に全文引用	島原の乱

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1942年4月	杉山英樹	ユニックな文章	紙誌	現代文学	「日本文化私観」を「理窟なしに」前月一番の作とし、「正に俗を制してゐる。反俗精神などいふ以上だ」と絶讃。小菅刑務所に関してのみ、世界の建築美学の粋を究めて設計されたものという聞き書きを記して誤りを指摘しながらも、「この文章では、やはり、かういふ風にかく以外には仕方がない、また、それでいいのである」と書き添える。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾選集』10(講談社 1982)に収録	日本文化私観
1942年6月	匿名(是矢壮太)	一読者よりの投書	紙誌	現代文学	「現代文学」同人たちのそれぞれの筆法を野球団になぞらえて茶化した文章。「八番は監督坂口遊撃手、攻守とも苜田そのけの名人芸を示す千軍万馬の古強者、試合当日のお天気で、くさつたりなげたりする悪癖あり、遊撃を守つてゐて、退屈するといったの間に居なくなる。マネージャーの野口富士男が、よく浅草の先まで探しにゆき、連れてどどると大抵試合はすんだあとで役にたらず」とあり、末尾の付記で「校了にする処へ坂口が意気陽々(マ)と小説持参したが無論まにあはず」とも書かれている。安吾は「今でこそ焼酎に二日酔などするが幼少の頃は飛行家志望で軍縮に失望して坊主の学校へ行かなかつたら今頃はアメリカ空襲の指揮をしてみたのだぞ」と豪語していたらしい	
1942年6月	大井広介	(編集後記)	紙誌	現代文学	「井上の力作『清河八郎』は、得たが、坂口の『天草四郎』の遅れたのダケは残念だつた。／日本浪漫派の龍児檀一雄の帰京も一段生彩を加へるだらう、彼は実朝を主人公の野心作に着手した。更に高木卓其他を擁してゐる私達は歴史文学にも多大の貢献を約束することができる」とある	
1942年7月	平野謙	文芸時評—坂口安吾『真珠』(文藝)	紙誌	現代文学	「真珠」について「大東亜戦争勃発以来、はじめて芸術家の手になる決戦下の文学らしい文学を読んだ気がした」と絶讃、「凡庸な作家なら当然失語症に陥らざるを得ない「神話」の絶対世界に、坂口安吾は見事手ぶらで推参したのであつた。彼が純正な芸術家だつたからである。彼が常に魂の感動を求めてやまぬ生粋の文学者であつたからにほかならぬ」と述べる。平野謙『現代作家論』(南北書園 1947)に収録の際、全篇にわたって周到に戦意高揚表現の排除・書き換えが施された。『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』、『坂口安吾選集』3(講談社 1982)に再録。初出ヴァージョンは『坂口安吾全集』3(1999)解題に引用	真珠
1942年7月	宮内寒弥	文芸時評	紙誌	現代文学	「真珠」について「十二月八日が、始めて完璧な小説へのかたちとなつて現はれたものと云つてよい」と評価。多くの作家が書き方を見つけかねていた題材を「あなた方」と呼びかけることによつて易々と小説にしてしまつたことに、私は、一番感服した」と述べる。『坂口安吾研究』Iに収録	真珠
1942年7月	井上友一郎	甘口辛口	紙誌	現代文学	「坂口の駆使用する用語は実に少い。面白い、面白くない、つまらん、つまる、馬鹿、日本一といふやうな範囲である。大井も語みは多くはないが、しかし滔々として述べ立てると序論の中で夜が明ける」と茶化したあと、「この二人が仲よく浅草あたりで飲んでゐるのは、双葉安芸の取組以上に面白い。酒が廻ると坂口はエスプリだけになつてしまふので、さすがの大井も十両どころの取組で断念して逃出してしまふらしい」とある	
1942年7月	無署名	(コラム)	紙誌	現代文学	無署名だが、当月号編輯担当の大井広介らしき文章で、「なんで、平野の原稿が遅れるか調べてみると、探偵小説に凝つて坂口大井と徹夜ばかりしてゐるといふ。今官一がカラマゾフの続篇を数百枚かいた向ふを張つてか、ボウの未完の長篇の解決篇を坂口平野は合作するにつき、なにしろ一言居士どうして仲々意見の一致を見ず、徒らに幾晩もつづいてゐるといふ」とある。『評伝坂口安吾』に全文引用	
1942年7月	山室静	文芸時評—欲の深さについて	紙誌	新潮	「真珠」の作者の心理が「新聞の愛読者の感覚に近いもの」と批判。「日本文化私観」も「痛快な文章」ながら「あまりに健康」で「原始的」とみる。「この方向がさらに進む時は、文化の滅亡でしかない」と説く。山室静『文学と倫理の境』(宝文館 1958)に収録	真珠 日本文化私観
1942年9月	岩上順一	文芸時評—進路への展望	紙誌	日本評論	「真珠」について「自己の生活をできるだけ外界の激動にむすびつけようとしてゐる」「安易な小主観への陶醉」と酷評	真珠
1942年11月	無署名	コラム「消息」	紙誌	現代文学	「坂口安吾氏 剣道研究中のところ、復(ママ)案成り近く小説「宮本武蔵」を起稿する」とある	
1942年12月	無署名	コラム「消息」	紙誌	現代文学	「坂口安吾氏。既報「宮本武蔵」は当分延期し、「島原の乱」第一篇を鋭意執筆中」とある	
1943年2月	菱山修三	文学について—最近の感想	紙誌	現代文学	「世間知の文学、良識の文学を嫌ひ、ファルスの文学に精魂を傾け、ギリシヤ古典喜劇を愛し、ボルテエルを友とした坂口安吾(略)坂口の小説は万人を泣かしめるには未だ多少の時日を残してゐるやうである。(略)坂口は少年時から変らぬ無地の絹のやうな貴族である。友よ、幸に自重せよ」とある	
1943年3月	無署名	現代文学寒中鍊成記	紙誌	現代文学	12月12日に野球の試合をして「坂口の快速球」が見られたとあるが、1955年の大井広介「『現代文学』の悪童たち」によると本当は「ファイン・プレイ」という野球盤で遊んだのを「本当の野球をしたことにして、次号に書くことにしよう」ということで書かれたイタズラ記事らしい	
1946年2月	無署名	文壇うわさ話	紙誌	光	「新潟の二つの某々新聞が合同するに際して」會津ハ一が社長で安吾が編輯長の新聞を作ろうと交渉開始、兩人とも「名義だけといふことで」「ひきうけた」というデマ記事。安吾は12月の『月刊にいがた』で、この噂を笑い飛ばしている	
1946年8月	尾崎士郎	芋月夜	単著	(扶桑書房刊)	エッセイ集。戦後まもない時期、尾崎士郎が戦犯に挙げられるという噂を聞きつけて、ながらく疎遠だった安吾が突然訪ねて来てくれた日の感動を語る「芋月夜」の章は、翌年、『論居随筆』(酣燈社 1947)にも再録された	
1946年9月	逸見廣	文芸時評	紙誌	早稲田文学	「外套と青空」について、荷風などの「自然主義的余裕」の産物と違って「精神と肉体の相剋に対する主観的な激しさが全篇をうづめている」と評価	外套と青空
1946年9月	佐々木基一	作品総評—坂口安吾「外套と青空」	紙誌	文学時標	「外套と青空」について「人間関係」が描かれておらず「主人公のイメージの中であらゆる関係と葛藤が行われている」ので、自閉的で現実感に乏しいと批評。『佐々木基一全集』I(河出書房新社 2013)に収録	外套と青空
1946年10月	平野謙	小説月評—坂口安吾「白痴」 「外套と青空」	紙誌	人間	「坂口安吾の近作が戦後第一等の文学作品であることは疑いない」として、「外套と青空」を「テーマの純一性を過不足なく生かした佳作」と評価する反面、「白痴」については、女に「生の真実」を託したが「やはりその真実の中味は、動物的な衝動と本能的な恐怖にすぎなかつた」として「傑作になりそこねた力作」とやや否定的に論評。平野謙『文芸時評』(河出書房 1962)、『坂口安吾研究』Iに収録	白痴 外套と青空
1946年10月	郡山千冬	文芸時評—坂口・井上・北原・高見・石川・北島・潤一郎	紙誌	文芸首都	「坂口安吾もようやく芽を吹いて来た」と友人として喜ぶ文章から始まるが、「外套と青空」などの小説については「明晰ではない」悪文として批判。代わりに「文芸時評」は天晴であつたと評価する。「人間、なかなかあはは喋れないものである」と。『坂口安吾研究』Iに収録	外套と青空 文芸時評
1946年10月	柴田鍊三郎	文芸時評(2)—リアリズムの貧困性	紙誌	三田文学	「外套と青空」について「性欲というものの儂いモメント」を描こうとした努力は評価するが、「人間性の分解とか探究にまでは進められていない」と辛口批評	外套と青空

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1946年10月	匿名子	作品月評—新秋の作品	紙誌	新小説	「女体」について「一つの人間追求の新しい視角を提起したものと評価	女体
1946年10月	織田作之助	二流文楽論	紙誌	改造	世界文学の古典に比べたら日本文学はすべて二流とするが、かつての新感覚派や新心理主義、現代フランスのサルトルなど「新しいスタイルの出現」はみな「二流文学への献身から生れ」たものである、と主張。現代日本では、太宰と安吾に「二流に徹した新しさがある」点で「誰よりも期待する」と評価。織田作之助『六白金星・可能性の文学』(岩波文庫)などに収録	
1946年11月	岩上順一	文芸時評—類魔の触手	紙誌	文学	「外套と青空」について「要するに一人の娼婦との肉慾的交渉のうちに没入しようとする一人の男作家を描いたものにすぎない」「作家の観念の図式化にすぎない」と全否定。新日本文学会の初代書記長という立場で、戦後の左派評論家による安吾批判の一類型をつくった文章。その後の彼らの発言はすべて、集団的な敵意の発散であり、論理性に欠ける	外套と青空
1946年11月	河上徹太郎	文芸時評Ⅱ	紙誌	東京経済	「白痴」について「類例の珍しい型の傑作」とし、「天地混沌の中での原始人の畏れなき愛慾を彷彿たらしめるものがある。かういふ天変地異にも超然たる裸形の肉慾の迸放は、現実の凡俗の世界から昇華して観念小説のテーマに酷似して来、例へばドイツの浪漫主義作家が取扱ふ異教の愛慾の如き相貌すら呈してゐる」と批評。「外套と青空」については「肉慾性の昇華がこれ程美しくなく」ととりとめがなくなつてゐる」とみる。河上徹太郎『戦後の虚実』(文學界社 1947)に収録	白痴 外套と青空
1946年12月	滝崎安之助	終戦後の文壇への一瞥	紙誌	芸術研究Ⅰ	「人々を単なる性欲の固りとして、動物として、戯画化するということ自体がすでに、少なくとも淫売婦に対してだけは人間的同情を忘れない永井荷風氏などよりもさらに遥かに低劣な作者の人間感情を証明している」と悪罵。新日本文学会に抛る評論家からの類型的で悪意に満ちた安吾批判。滝崎安之助『現実からの文学』(八雲書店 1948)に収録	
1946年12月	織田作之助	可能性の文学	紙誌	改造	安吾・太宰らと「現代小説を語る座談会」のあとルパンで飲んだようすが面白おかしく語られる織田の文学論。志賀直哉ら文壇の権威を否定し、人間の可能性、小説形式の可能性を追求した文学こそが本物であると主張。織田作之助『夫婦善哉・怖るべき女』(実業之日本社文庫)ほか各社文庫に収録。	現代小説を語る座談会
1947年1月	織田作之助・吉村正一郎	可能性の文学[対談]	紙誌	世界文学	吉村が、安吾のエッセイに比べて「白痴」「外套と青空」などの小説は面白くないと言い、「もつと、彼の小説の形は、グロテスクになつた方がいいのぢやないか。形が割に整ひすぎて。彼の考へてること、つまりエッセイで言つては、そんな形の整つたものぢやない」と発言。織田も「昔から坂口のファン」だが、小説ではもっと「形式のデカダンス」が必要だと同意。対談後の「追記」で、吉村は「その後同氏の近作二三を見るに、右の意見はひとまつ撤回されなければならぬ必要を感じた。例へば「いつこへ」(新小説十月月号所載)などは精神分析的な特異な作風を示し、将来の新文学を示唆するものとして興味が深い」と記した。『昭和を駆け抜けた伝説の文士“オダサク”』(河出書房新社 2013)に収録	白痴 外套と青空 いつこへ
1947年1月	保高德蔵	坂口安吾	紙誌	新小説	安吾が実は「情誼に厚い、常に最も高い、生活を望んで生きて行かうとしてゐる稀に見る好漢である」と述べ、戦犯に挙げられた尾崎士郎の力になり、GHQまで同道した話を紹介。士郎宛の20通余りの手紙も見せてもらったらしく、どれも真情あふれるものだったと。また、荷風や藤村らを酷評した「文芸時評」「デカダン文学論」も「傑作」と評価。小説はまだこれら評論ほどの傑作がないが、いずれ生み出さだろうと期待する言葉で終える	文芸時評 デカダン文学論 尾崎士郎宛書簡
1947年1月	匿名(Y記者)	常識を越えた向うの世界——新春作家訪問・坂口安吾氏	紙誌	東京新聞(10日)	小インタビュー記事で、安吾は正月以来、酒も飲まずに仕事中大という。飲みだすと止まらないので、仕事をする時は5日でも6日でも全然飲まないのだと。情痴作家といわれていることについては「肉体や性慾などいうものは人間にとってあたりまえのこと」で「わいせつなことを書いたとは思わない」と明言。「氏はむしろ精神的な恋愛を書きたいのだという、この上なく純粋で精神的だけれど焼けつくような恋愛が書きたいのだ」とあり、記者訪問時も「ある雑誌」にそういう念願のもとに作品を書き出したのだが、書いてみると自分でもあきれてしまうような方向に作品が流れて行ってしまう」と苦勞を語っていたという。「花妖」の新聞連載が始まる前月だが、媒体が「雑誌」なら3月発表の「二十七歳」のことか	二十七歳
1947年2月	中島健蔵	織田作之助と坂口安吾—素描	紙誌	新潮	「坂口安吾の墮落観は、決して戦争の結果生れたものではない。戦争がはじまるずっと以前から、身動きをしただけで最後、必ず石段をかけおりにしまふ奇怪な運命の人間を書いてゐたのである。かけおりにしまつたてに気がつくや否や、悲鳴をあげて、どこかにかき消えてしまひたい人間を書いてゐたのである」と批評。そこまでは旧友を懐かしむ調子もあったが、左派による類型的批判にも同調してみせ、戦後の安吾は「べつとり人間侮蔑の泥がついてしまつた」ので、「墮落論」で述べたような「便利な救ひの道」はどこにもない」と否定的にしめくくる。『坂口安吾研究』Ⅰに収録	墮落論
1947年2月	織田作之助	文学的饒舌	紙誌	文学雑誌	「作家の中には無垢の子供と悪魔だけが棲んでおればいい」という立場から、「僕は昔から太宰治と坂口安吾氏に期待しているが、太宰氏がそろそろ大人になりかけているのを、大いにおそれる」と述べる。織田作之助『夫婦善哉・怖るべき女』(実業之日本社文庫)に収録。	
1947年2月	山室静	文芸時評	紙誌	近代文学	「デカダン文学論」について、「これは無責任主義で、その精神に於てはデカダンスとはまるで反対の、素朴に肯定的な享楽主義經驗論議に見える」と否定的に論評。「外套と青空」「いつこへ」についても「通俗な情痴小説に接近」しており、主人公の行動は自墮落なだけで「大胆といふよりは卑怯」と批判。もっとも「吹雪物語」の頃から安吾作品は好きだったと述べ、「氏や石川淳氏の作が注目に値するに間違ひはない」とも。同年6月「デカダンスの文学」の原形といえる時評	デカダン文学論 外套と青空 いつこへ 吹雪物語
1947年2月	佐々木基一	淪落と青春と肉体—坂口安吾の近作断想	紙誌	日本読書新聞(26日)	「白痴」では、女の「肉体はたしかに地獄の使者めいた姿をほのめかせたが、それ以後、女の肉体はすべて淪落の陶酔場所となつて来た」と批判的に述べながらも「然し、坂口安吾はいまなお物すごい速力で走つてゐるのだ。何処へ行きつつか、恐らく作者自らも御存知ないだろう」として、「女体」「恋をしに行く」に始まる長篇に「期待をつなぐ」としている。『佐々木基一全集』Ⅰに収録	白痴 女体 恋をしに行く
1947年3月	北原武夫	坂口安吾	紙誌	社会	新進作家時代からの交友を語り、近年の「墮落論」や「デカダン文学論」などは「少し気合ひを掛け過ぎるところ」があり「彼のために僕は取らぬ」と批判。「彼の人物にも、彼の作物にもある、この一種空洞の感じ、これを彼が何によつて埋めてゆくかが、今後の彼に課せられた難問であらう」と友情をこめて述べる	墮落論 デカダン文学論
1947年3月	高田瑞穂	類魔派の現実感覚—坂口・織田の文学論をめぐって	紙誌	進路	安吾や織田ら「類魔派」の作品が流行するのは、戦後の「現実の混乱が色濃く反映している」からであり、そうした現実「馴れ合つてうごくと」の危険性を語る。いわば安吾が敵とする「道徳家」の論理で、「デカダン文学論」に潜む欲望礼讃と「自己破壊」の観念を徹底して批判。「外套と青空」などの小説もすべて「恐るべき自己破壊」のモデル」と見、「肉慾の餓鬼の奇妙な饗宴以外の何物でもない」と切り捨てている。『坂口安吾研究』Ⅰに収録	デカダン文学論 外套と青空

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1947年3月	古谷綱武	文学通信	紙誌	新潮	「道鏡」について、「いちおうはよませる」と皮肉な評価。いつもの「書きなぐるペン」を抑えた筆致だが、まだ「ペンもころもナマすぎるようだ。格がない」と印象批評。『坂口安吾研究』Ⅱの文献目録で「古谷綱武」となっているのは間違い	道鏡
1947年3月	佐々木基一	戦争のスタイル	紙誌	東京新聞(20日)	石川淳、安吾、太宰ら戦後の「注目すべき」作家たちのスタイルは、「戦争によって鍛えられ、戦争によっておそらくは自己を自覚した」もので、花田清輝とも通じるスタイルだという。「寒風吹きさす荒野を、ある決意に駆られて歩き続ける捨身の姿勢」があると好意的に評価。『佐々木基一全集』Ⅰに収録	
1947年4月	青野季吉・伊藤整・中野好夫	創作合議—坂口氏の「道鏡」	紙誌	群像	「道鏡」について、中野が「歪められた歴史小説の典型的なもの」と批判し、他の2人も同意。伊藤が「『白痴』を書いたとき、非常に用心ぶかく書いて、小説の設定も一応きちんとしてやっているが、この頃は造形をもどかしがってやっていない」と述べ、青野も「『白痴』以外には殆どおもしろいものはない」と批判。『坂口安吾研究』Ⅰに収録	道鏡 白痴
1947年4月	河盛好蔵	創作短評—坂口安吾「道鏡」	紙誌	人間	「白痴」「女体」よりも「道鏡」のような歴史小説に安吾の真骨頂があるとする。「従来まで春本の材料でしかなかった道鏡」が凛冽な「女帝の魅惑に幼児の如く素直で、純一であるといふ作者の解釈」を評価し、「作家的力量によつて読者を押し切るところは相当な手腕と云ふべきであらう。スタンダールの『イタリヤ年代記』を思はせるところがあるなどと云ふのは褒めすぎであらうか。文章も立派だと思つた」と絶讃	道鏡
1947年4月	石川淳	いすかのはし	紙誌	人間	短篇小説で、安吾の話題が2カ所に登場。安吾が泥棒にペンを取られかけたが、向こうから返してくれた話、酒場で出逢ったとき「道鏡」を書いたところで相当の自信をもっていたようだという話の二つ。	道鏡
1947年4月	江戸川乱歩	一般文壇と探偵小説	紙誌	宝石	1946年11月の座談会で出逢い、乱歩主催の土曜会に招かれた安吾は「ヴァン・ダイン乃至甲賀三郎流の純本格論者」で、犯人当て推理小説執筆の意気込みを語ったという。江戸川乱歩『幻影城』(岩谷書店 1951)に収録	不連続殺人事件
1947年4月	滝崎安之助	芸術至上主義の克服	紙誌	文学	「墮落論〔続墮落論〕」について、「反逆のための反逆、つまり虚無主義である」と一蹴。安吾のいうように「もしも『対立』が人間の本性であるなら、融和もまたおなじ度合いにおいて人間の本性でなければならない。融和だけ外して考察する態度は「現実を畸型化し、おし歪めて」いると。安吾や荷風ら「芸術至上主義者」は「民衆の立場」がわからず、よって「社会全体を正しく見うる立場」にない、と批判。滝崎安之助『現実からの文学』に収録	墮落論〔続墮落論〕
1947年5月	小川武	無礼講対談—坂口安吾氏	紙誌	月刊にいがた	漫画家でもある小川武の突撃訪問記。流行作家となって忙しい安吾の様子が垣間見られる。若月忠信編『資料坂口安吾』(武蔵野書房 1988)に収録	
1947年5月	村山真雄	岳父坂口五峰の思い出	紙誌	月刊にいがた	安吾の父仁一郎の甥で松之山に住む村山真雄が、新潟中学へ進学のため仁一郎宅に1897年から1903年まで寄宿した折の、食卓だらけでにぎやかだった家のようなすが生き生きと回想されている。『資料坂口安吾』に収録	
1947年5月	洪川驍	観念小説と新円階級	紙誌	文壇	石川淳と安吾とを「観念小説の台頭」の代表に挙げ、彼らの作品が「エッセイ的な作品とならざるをえないのは、その本質的なものが自己弁護、即ち独断の合理化にあるからである」と断定。さらに、こうした作を「支援」するのがヤミ商人などから成り上がった「新円階級」であり、たちまち「新興ブルジョアに移行する」者たちだと決めつける。彼らは「自己の階級の利益を主張し、合理化するやうになる。かくて彼等は新しい法律を要求し、新しい道徳を勝手に作りあげようとする」と「墮落論」の論旨を階級理論によって意図的に曲解し批判	墮落論
1947年5月	洪川驍	墮落論解説	紙誌	文藝	「墮落論」各文の言葉尻をとらえて、安吾の論旨を意図的に逆読みし続ける奇妙な論文。未亡人が新しい恋をするを「彼はなぜ墮落というのでしょ」と問い、「墮ちよ」との叫びは「法律を無視しようという思想」であり、「強盗、強姦だってかまわないという考え」だと徹底的に的外れな批判をくりかえす。同時代の代表的な「墮落論」批判として『坂口安吾研究』Ⅰに収録	墮落論
1947年5月	西義之	肉体の喪失—坂口安吾論	紙誌	文華	「墮落論」「デカダン文学論」などを「薄汚い評論」と罵倒。「二十七歳」についても「いやらしい口つきで語つた小説(題は忘れた)」と書く。プロレタリア文学の一つの達成点と見、そこから「後退した」荷風や秋声を安吾が批判するのは「正しい」が、そう主張する安吾もまた「後退した」作家だと位置づけている。「白痴」「外套と青空」「母の上京」などについて、丹羽文雄は10年前に同じことをより見事に書いたと述べる。安吾のは「人間の喪失」だけが「共同便所の臭いがする」などと、けなしまくる	墮落論 デカダン文学論 二十七歳 白痴 外套と青空 母の上京
1947年5月	藤原定	文芸時評	紙誌	文藝	「肉体をして語らしめる」という安吾の言葉に疑問を呈し、「霊肉分裂症」のような結果に終わる徴候が「戯作者文学論」に現れているとする。精神より肉体を優位に立たせるなら、低俗なエロ小説とどう差別化するか、という難題は続くという	戯作者文学論
1947年5月	浅見淵	文芸時評	紙誌	風雪	安吾や石川淳、織田作之助らを同列に批判。「恋をしに行く」については「野心的な新しい試みといったものが見られなくもない」と皮肉まじりに評価しつつも、安吾が漱石の作品を「肉体といふものが全くない」と批判した言葉をそのまま返し、「実感的な肉付けが不足してゐる上に、これ以上の発展性が予期せられぬ」と批判。「母の上京」も「作者のなんらの切実感も滲み出てゐないので、結局、江戸時代の洒落本めいた低俗なかしみに墮ちてゐる」とする	恋をしに行く 母の上京
1947年5月	小田切秀雄	新文化の情熱と感覚	単著	(九州評論社刊)	「戦後文学の一年」(1946.11.20筆)の章で、安吾や高見順、中山義秀、豊島与志雄らに一定の評価を与えながらも、戦争中「不遇」でいることができていたことに問題ありとする。「墮落論」について「『墮落論』は吾々の体内にもこびりついている。それを『墮落論』としてつかむことからしてまず容易でないし、それを払いのけることは一層容易でない」が、この努力と単なる「我執と腑分けされないままに墮落せよと叫ぶのはよくない」と述べ、「『誠実なる墮落』というような文学的(!)表現でそのあたりが曖昧にさせられる仕組になっている」と批判。「かつてのプロレタリア文学運動」が求め続けた「社会制度の創出」が第一義であると同く。安吾の小説についても、文学史的な評価は認めながら、「実験室的なやり方」で「作品を小さく限定してしまう」と批判的。この章は小田切秀雄『日本の近代文学』(真光社 1948.2)にも再録	墮落論
1947年5月	高見順	文芸時評—嘆きと自棄	紙誌	東京新聞(22日)	前月刊行の『逃げたい心』序文において「日本文学を支配する雑誌システム」が作家に短篇ばかり書かしたと、安吾自身「もつとマシな作品」に専念したかったと嘆く、その言葉尻をとらえて激しく罵倒。それは「書けなかつた」だけで「責任は作家にある。己れにある」と。高見順『文学者の運命』(中央公論社 1948)に収録。これに対する安吾の反論「高見君の一文に関連して『俗物性と作家』」が同紙5月27、28日に掲載された	序『逃げたい心』
1947年6月	山室静	デカダンの文学	紙誌	群像	安吾らが「デカダンの文学」といわれることに疑義を呈する。デカダンの本来は「生の虚無感、そのどす黒い色濃い倦怠」であり、安吾はむしろその逆で「素朴な生の肯定」が主調と説く。もつとも、デカダンを標榜する群小作家たちよりも、「敬愛する」安吾や石川淳などはずっとデカダンに近い作家とみているようである。山室静『文学と倫理の境で』(宝文館 1958)に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1947年6月	杉森久英	ふたりの情痴作家	紙誌	女性改造	「白痴」について、「白痴の女」をヒロインに仕立てたのが「賢明」で、「人間獣」が描き切れたと批評。「知性も精神も痺痺し、欲望と感覚のみが生きて目をさます瞬間—すなわち、人間が一匹の獣に、あるいは肉慾の虫にまで化してしまう瞬間が、つねに坂口の小説のヤマになるのである」とするが、この傾向は「人間の抽象化」や「性格の軽視」につながり、それが「花妖」失敗の一因でもあったと指摘。「白痴」と「外套と青空」は最もよい作品だったが、この行き方ではいずれ行き詰まると予想	白痴 外套と青空 花妖
1947年6月	林房雄	小説時評—小説の目的	紙誌	小説と読物	当今の小説を「私小説派、本格小説派、新社会派、新戯作派」の四つに分類、新戯作派には織田、安吾、太宰、石川淳らが含まれるとし、彼らの小説の目的は「人間を楽しませることである。(坂口安吾氏「座談会」)とした。これが「新戯作派」命名の由来とされる。文壇では第一と二が主流、三は異端、四は外道とされるが、実質は逆であると主張、「小説の目的はすべての芸術と等しく人を楽しませることだ。小説の精神は永遠に新しい戯作精神でなければならぬ」と論述	
1947年6月	無署名	新戯作派のルールたる安吾和尚	紙誌	新夕刊	発表誌未見のため日付は不明だが、『無頼文学辞典』(東京堂出版 1980)「新戯作派」の項によると、新潮6月号発表の「教祖の文学」を時評した記事で、早くも「新戯作派」の名称を使用している	教祖の文学
1947年7月	小田切秀雄	文学者の責任—岩上順一・平野謙批判	紙誌	新日本文学	新日本文学会の仲間である岩上順一の「文芸時評」(1946.11)に触れ、安吾批判の仕方がひとりよがりだと反論。「坂口の作品は、かぼそい自我を生き抜こうとして起ち上っているその限りでの激しさが一つの魅力で、評者が魅力を感じないことを読者に強要はできないはずだと。ただし、安吾の人間解放の要求は「極めて歪んだもの」であるとし、「誠実なる墮落」などという言い方が「逃げ口上」だと別角度から安吾批判を展開。『戦後文学論争』上巻(番町書房 1972)に収録	墮落論
1947年8月	平野謙	平野探偵の手記	紙誌	進路	戦争中、大井広介の家に『現代文学』同人が集まり、探偵小説の犯人当てをして遊んだ折のエピソードを紹介。いちばん熱心に行ったのは安吾、大井、平野、荒正人の4人だったという。クリスティの『三幕の悲劇』では、容疑者3人のうち安吾が2通り推理し、どちらも外れた話など大井の「頭脳錬成」(1942)にもあるとおり。『平野謙全集』13(新潮社 1975)、中公文庫版『不連続殺人事件』(2024)に収録	
1947年8月	辰野隆・嶋田琴次・大仏次郎	現代作家寸評—並に比較文学の進歩について(鼎談)	紙誌	日本読書新聞(6日)	嶋田が「ぼくは坂口安吾をさつきから何度もほめたが」と前置きして(ほめた部分は掲載ナシ)、安吾の荷風批判には「同感する点もあるが、谷崎氏が文壇を意識して書いておる文学者だというには納得できない」「少しひがんでおるのかもしれないね」と述べ、他の2人も同意。大仏は安吾のことを「一種の文壇の特攻隊です、それだけに急ぎ過ぎておる」と評す	通俗作家荷風
1947年9月	岩上順一	愛憎と肉体について	紙誌	文壇	「戦争と一人の女」のあらすじをねじ曲げて、「肉慾の中から人間的な愛情にまで高まろうとし」妻になることまで望む元娼婦の女が、女性蔑視の男に冷たく拒絶されて絶望し、「男にたいする抗議」として「どうにでもなるがいいや」とつぶやく、という話だと解説。主人公の男は「人間は肉に支配される以外はない。だから、もっと高く精神的なものをもとめてもどうなるものでもない」と考えているとし、これが「作家の結論である」と断定する。戦争については、安吾が「壮大な見世物」と書いたことにこだわらぬあまりに「これほどの暴政政治への無感覚な喝采はない」と独特の飛躍した論理で攻撃する。この戦争に「喝采」する姿勢が愛情の問題にも及び、「現存の暴力的秩序にたいする積極的な支持となるのだ」と極論する。石川淳、織田作之助も同断とし、荒正人、平野謙までもその仲間に加えているところに、彼ら左派評論家たちの内紛の傷痕が見てとれる。『坂口安吾選集』3(講談社 1982)に収録	戦争と一人の女
1947年10月	清水崑	同人巡礼—坂口安吾	紙誌	文学界	安吾の似顔絵とともに、翌年創刊される『ろまねすく』同人懇親会のようなすを記す。安吾、辰野隆、林房雄、田村泰次郎、船山馨、寒川光太郎、清水崑、頼尊清隆らが参加。席上「新戯作派」という誌名が提案された時、安吾は「そんな言葉は評論上の比喩として用いるのなら構うまいが、雑誌の名前にするのはおかしい。なにも我々はそんなことを標ぼうして小説を書いているわけじゃないから」と否定した。清水崑「筆をかついで」(東京創元社 1951)に収録。『評伝坂口安吾』に引用あり	
1947年10月	高見順・豊島与志雄・中島健蔵	創作合評—坂口と「暗い青春」	紙誌	群像	出席者3人が揃って「暗い青春」を高く評価。高見が「今までの坂口君がもっていなかった悲しさがある。人生の何かにぶつかっている」とし、反面「オモチャ箱」の方法を「ああいう書き方は小説でもない」と批判、これにも他の2人が同調、特に中島は、牧野信一を美化する傾向があることについて安吾が「おもしろくない」と思い、「いじの悪い動機」で暴露小説を書いたと全否定する。『創作合評1』(講談社 1970)、『坂口安吾研究』I、『坂口安吾選集』6(講談社 1982)に収録	暗い青春
1947年11月	野上余志郎	否定と憎悪の文学—坂口安吾氏の評論集「墮落論」に寄せて	紙誌	文学	「墮落論」以後の数篇は「政治を現存の社会制度やその運用としてのみ観る無智と、政治を文学の対立物としてみる偏見」で成り立っていると全否定、文学者として「致命的である」とまで断言する。「号堂小論」の中で「政治が民衆を扱ふとすれば文学は人間を扱ふ」という一文について、「民衆と人間を別なものとして解釈する粗雑な人間観」と説くが、逆に野上の読みの浅さが露呈している。「墮落論」批判の「比較的早い時期における代表的論考」として『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』(有精堂出版 1978)に収録	墮落論 号堂小論
1947年11月	丹羽文雄	私は小説家である	単著	(銀座出版社刊)	「流行の倫理」の章で、安吾に反論。安吾が「通俗と変貌」とで丹羽の小説「現代史」や徳永直の「はたらく一家」を文学になっていないと批判したことに対するもの。「小説といふものは、自爆するものだ」と叫んでゐる」安吾の論理は「子供が両親のなだめにも応じないで喚きちらしてゐるのに似てゐる」と逆襲。社会問題と真剣に取り組んだ小説もまた、書かずにはいらぬから書くのであり、常に「自爆」し続けているのだ、と	通俗と変貌と
1947年12月	佐々木基一	「墮落論」の周辺	紙誌	三田文学	「墮落論」の主題を「既成道徳への破壊作業」と捉えるだけでは不十分と指摘。安吾はロレンスのような「破壊主義」ではなく、「無きに如かざるの精神」をもって「ただひとり、生きて走つてゐる個性」であり、「風博士」こそ坂口の本体に外ならず、僕らは未だに坂口安吾の正体をとらへるのに難渋してゐる」と述べる。佐々木基一『現代作家論』(未来社 1966)、『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』に収録	墮落論 風博士

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1947年12月	中野好夫	昭和22年文学の問題	紙誌	人間	石川・太宰・安吾・織田らの傾向について「将来もしわが敗戦後の一世代の文学を論じる文学史家があるとするならば、彼がこの一つの時期の特殊意義を求めて就くであらう作家群は、なんといつてもおそらくは上記数人の作品であらう」とし、安吾と田村には特に「肉体そのままを通して把握しうる意識の追究」をみる。エロでもデカダンでもなく「むしろ健康」だとしつつも、それは「ヒロポン的健康さでもいふもので」「インポテンツの性慾にも似た人工的昂奮である」と指摘。また、空襲や戦場など異常時の体験の中での無力感を表出しているのは「思想の無力」というよりも「人間性の弱さに原因するものである」といくら批判的に述べる。『文芸評論年鑑・昭和23年度』(全国書店 1949)に収録	
1947年12月	匿名(誤)	世俗の達人・坂口安吾	紙誌	東京新聞(11日)	安吾の本質は「常識家、教育家、宗教家」であり「人間心理に関する世俗の達人」であるため、「やくざの親分」や「いんし邪教」の教祖にもなりうる存在とみる。「かれは自分のうちのそれらに猛然と謀反するのだ」と説く。『坂口安吾全集』6(1998)月報に収録	
1947年12月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集Ⅰ(銀座出版社刊)	福田恒存『現代作家』(新潮社 1949)に「坂口安吾」としてまとめられた際の「文明批評について」の章。安吾は「すぐれた心理家であり人間通」であり、「すこぶる健全なモラリスト」であるがゆえに、小説の姿は「畸形となつてあらはれなければならぬ」という。進歩的な知識人ほど自分自身の姿に盲目で偏見にとらわれているが、「安吾における常識の健全さは、畢竟するにかれが自分自身にとらはれぬ、いはば一種の悟道に似たものから生じてゐる」と説く。全8章から成る早い時期の安吾論だが、名評として『現代日本文学全集』49(筑摩書房 1954)、『坂口安吾研究』Ⅰ、『文芸読本 坂口安吾』など再録本も多い	
1947年12月	林房雄	我が毒舌	単著	(銀座出版社刊)	『新夕刊』1947年2～10月に連載した「文芸日評」をまとめたもの 「道鏡」の項では、「墮落論」などで説かれた「天皇ロボット論」と「道鏡」の天皇像が違うと指摘。「近頃めづらしい天皇に忠義な小説であつた」と皮肉っぽく批評しつつ、他の安吾作品よりは「やや高級」と評価 「闇小説」の項では、織田作之助、石川淳、安吾をひっくるめて「題材も思想も手法もドサクサの闇市場式で、正常と健康を取りもどした世の中では消えてしまふ運命にある」と否定 「教祖論」では、「教祖の文学」について、「小林秀雄論としても、作家対批評家の問題としても、坂口自身の文学信条の放出として眺めても、それぞれの意味で面白い」と評価。林はかつて小林の信者だったがが独立したといい、安吾もそうだと断定、そして今や「坂口教の教祖になつた」と述べる。優れた教祖がそうであるように「自分のメスリズムとドグマに読者をひっかけるのが作家である」とし、皆が小林級の教祖をめざせと説く	道鏡 教祖の文学
1947年12月	横山はるひ	坂口安吾先生をお訪ねして一思つたより優しい人	紙誌	婦人春秋	バレエ・ダンサー横山はるひの坂口家訪問記。水曜日の面会日のようすがユーモラスに描かれ、案外丁寧にインタビューに応じている。『坂口安吾全集』別巻(2012)月報に収録	
1948年1月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集Ⅵ(銀座出版社刊)	『現代作家』に「坂口安吾」としてまとめられた際の2「自伝的作品について」の章。「石の思ひ」に始まる自伝的小説の主題に言及、「宗教も墮落も、世間をすてるといふことと、世間にそむくといふ意味において、所詮はひとつことなのである」「ふたつを同時にすくひとするものとして、かれは文学を選んだのだ」と述べる	石の思ひ
1948年1月	大井広介	坂口安吾に関する考証	紙誌	風報	「白痴」「外套と青空」にサルトルの影響を指摘した青野季吉の意見を実証的に否定。「FARCEに就て」「日本文化私観」「青春論」を一部引用して、「坂口の文学は、赤ん坊のまま大きくなった純一さの延長線上に肯定的飛躍的に拡充されるのだ」とユニークな賛辞を送る。また、戦争中「大阪在の藤沢恒夫が坂口鼻屑で向うの出版屋からかきおろしの依頼があり、坂口は『猿飛佐助』をかくと云いながら、実現しなかった」と回想。『坂口安吾研究』Ⅰに収録	白痴 外套と青空
1948年1月	飛鳥均平	「墮落論」の坂口安吾氏訪問記	紙誌	若草	1947年10月に坂口家を訪問した記録。眠るためには「いつもサントリイを二本半飲むんだ」と言い、「五日ぶつ通しで書いた」直後には、道行く人々が皆「真正面に物凄い勢いで走ってくる」幻覚をみてすくんでしまったと語る。また、「日映で、一卷物の芸術映画を撮るついでうんでね。素晴らしい脚本を書いたんだがね。映画にはならなかつた。アツツ島の幽霊の出る話だ」とある。『坂口安吾研究』Ⅰに収録	
1948年1月	小林達夫	坂口安吾論—観念小説の発生について	紙誌	早稲田文学	戦前からの安吾の全作品について「道化的人物が踊っていない作品はない」と指摘、「木々の精、谷の精」の葛子の自殺でさえも現実の姪の自殺を「ファルス化」したものとする。二十代の安吾にはまだ「墮落」の思想はなく「虚無」と「淫楽」に対する絶望を根本とする「懐疑的なニヒリズム」の思想があり、これらが「非現実的な表現でぎこちなくなつて」しまった戦後の代表作群にも通底していると否定的に論評。「閑山」「紫大納言」など説話的小説については「フィクションの面白さ」があり「器用な巧みな筆」の秀作であつたと評価。戦後の作品では「母の上京」だけ、「観念的な文章のないため」素直に感動したと記す。『坂口安吾研究』Ⅰに収録	木々の精、谷の精 閑山 紫大納言 母の上京
1948年1月	木村一郎	阿部定と坂口安吾の対談会に 応ふ	紙誌	オール獵奇	安吾と定の対談で木村の自著『お定色ざんげ』が「下品」と決めつけられたことに怒りを表明、上品と下品の定義を言え、とそれこそ下品に吠えたもの	阿部定・坂口安吾対談
1948年1月	丹羽文雄	文芸時評	紙誌	文學界	「不連続殺人事件」について、「素人の推理小説である」と断じるのみの印象批評。「暗い青春」については、「アクロバットする点では織田作之助と似ているとし、「織田以上に世間師であると坂口安吾を私は眺めてゐる」と否定的に論評	不連続殺人事件 暗い青春

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1948年1月	無署名	今年のホープ—作家 坂口安吾氏	紙誌	新潟日報(9日)	安吾を今年のホープと呼び、「彼のなりふりかまわぬ風体や常道を選した生活ぶり、さては作品からうける感じで天下の変わりものと見られがちだが彼の「墜落論」や作品の底を流れる思想は極めて厳肅なもの、真実についてつき破らんとするはげしさ、すごいまでにするどい人間観照のすがたが見られる、あの境地へは生ぬるい常人が到底及び得ないだろう」と絶讃	墜落論
1948年2月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集V(銀座出版社刊)	『現代作家』に「坂口安吾」としてまとめられた際の3「初期の作品について」の章。安吾の作品は「観念のために実生活を実験に供する」もので、「私小説の伝統とはまったくちがふ」と述べる。たとえば「蟬」には「心象風景のモンタージュ的な流れはあるが、具象的な風景は浮かんでこない」と解説	蟬
1948年2月	キクチ・ショーイチ	見立て戯作者	紙誌	文学	石川淳の戦後の江戸戯作者への傾斜を批判。「近代文学的思想乃至は観念にたいする一種の抵抗」とみるが、否定のための否定は意味をなさないと論じる。同じ論理で安吾の「思想なき眼」も、あらゆる思想・観念に対立しようとする「態度があるにすぎない」と一蹴。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	思想なき眼
1948年2月	小田切秀雄	日本の近代文学	単著	(真光社刊)	1947年5月刊『新文化の情熱と感覚』所収論文の再録	
1948年2月	佐々木基一・花田清輝・野間宏・福田恒存・加藤周一	戦後(7フレ・ケール)文学の方法を求めて[座談会]	紙誌	総合文化	花田が安吾について「非常に合理的な——科学的ではありませんが、合理的な一面があつて、やはり自分というものは芸術家であると同時に批評家でなければならないという、そういう立前をやはり貫いていると思う」としながらも「ノスタルジックなものが相当濃厚であり、あゝいうものがやはり否定されなければならない」と批判	
1948年2月	宮本百合子	一九四六年の文壇	単著	文芸評論集(近代思想社刊)	「デカダン文学論」が「日本の民主的解放という流行語にたいする辛辣な反措定としての人間性の露出」を主張、力説していると述べるが、「単に反措定的存在に止るということ」が封建制との闘争の上では「安易さへの停滞」であるとする	デカダン文学論
1948年3月	舟橋聖一・梅崎春夫・椎名麟三・高木卓	現代作家論[座談会]	紙誌	文芸時代	舟橋が「もつとも端的に、坂口を語っているのはやはり「小説新潮」に出た「写真」だね。あの生活態度だけだ。どうも書いているものは半分何か足りない」と印象を述べ、高木が「感想文的な、随筆的な要素が多くて、小説における、いわゆる形象化的努力」が足りない、と同調しつつも「古都」の頃の方が近作よりも「滋味」があつたと旧作への愛着を語る	
1948年3月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集IV(銀座出版社刊)	『現代作家』に「坂口安吾」としてまとめられた際の4「歴史小説への道」の章。「安吾の歴史小説には時間といふものがなく、ただある人物の正体が空間的に、あるひは断面図的に描写されてあるだけ」で、それはつまり歴史小説の形式を借りて「万人共通の人間心理」を描いていると見る	
1948年4月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集III(銀座出版社刊)	『現代作家』に「坂口安吾」としてまとめられた際の5「笑劇と説話への道」の章。「竹藪の家」あたりからすでに「笑劇(ファース)と説話(フェアブル)との二つの契機」があつたとする。喜劇は「必然と合理との名において」笑うものだが、笑劇は「必然と合理とをこそ、ばかにして楽しもうとする」。また、説話形式の作品は「素材のもつ現実性が邪魔になり」思い至つたと見る	竹藪の家
1948年5月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集II(銀座出版社刊)	『現代作家』に「坂口安吾」としてまとめられた際の6「文学論について」の章。「小説を書くことが生きること」と同義である作家なので、文学論のほうが人生論よりも「深く人生の真実を突いてある」と説く。「文学のふるさと」を再読するだけでいい、「不幸から救はれるには不幸にすぎない以外に道はない」ということがわかると解説	
1948年5月	宇野浩二	現代流行作家の文章	紙誌	りべらる	昭和7、8年頃「牧野信一にすすめられて」安吾の初期作品群を読み「これはなみなみならぬ才人である」と感心したという。特に「黒谷村」と「竹藪の家」に「もつとも感心した」。最近の「白痴」の冒頭を引用して「『手堅さ』などといふものが少しもないところに、おもしろみがあるけれど、また、『あぶなづけ』がありすぎるのと、作者が、読むものに、おもしろがらせようと、するやうなところなどがあるのが、気になる」と批評	黒谷村 竹藪の家 白痴
1948年5月	杉浦明平	デカダンス文学と「家」の問題—織田、坂口および太宰を通じて	紙誌	文学	安吾の本質は「実は階級的な落伍者、ルンペンなのである」と規定し、その家庭否定・女房否定論は、女を「ただ女体、生殖器に還元してしまう」として批判。「白痴」や「外套と青空」についても「女房と淫売婦が同じであるとすれば、社会的な諸関係が捨象されもつぱら局部だけで生きている女こそ、もつとも理想的な人間的像ではないか」と逆説的に批判。左派の類型的な批評で論理性はない。『坂口安吾研究』Iに収録。『文芸読本 坂口安吾』に抄録	白痴 外套と青空
1948年5月	小林達夫	続坂口安吾論—二律背反性について	紙誌	文学行動	安吾作品には常に「精神と肉体、知性と無知、常識と没常識、素朴と複雑、観念(世界)と現実(世界)」などの二律背反性があり、田村泰次郎などの「卑猥な」肉体派ではなく「多分に精神主義的な肉体派である」とみる。「文学のモチーフ」としては評価できるが、それがどの作品でも「類型的な人間の登場」を導く結果となり、「作品の弱さ」にもなっていると否定的に批評。『坂口安吾研究』Iに収録	
1948年6月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集VII(銀座出版社刊)	『現代作家』に「坂口安吾」としてまとめられた際の7「戦後の作品について」の章。戦後のインテリたちは皆、戦中を雌伏の時と我慢して生き抜いてきたかのような顔をしているが、安吾は堂々と「国全体の愚劣さに、それを愚劣と承知して殉じて」滅びるのを覚悟して生きたと見る。「白痴」以後の作品が、戦後において自分たちの愚劣と不正をもてあましてゐるひとたちの心に、切実な共感をよびおこしたのも当然であつたと解説	白痴

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1948年6月	小田切秀雄	人間的理想と文学	単著	(くれは書店刊)	「現代の人間の課題と文学」の章で、1947年の『新文化の情熱と感覚』所収論文とほぼ同じ安吾論を述べ、「人間の単なる近代的解放だけを要求する傾向」の中でも封建的なものとの戦いならば「共同し協力せねばならぬが、その解放の方向、内容がデカダンスに向うのである場合これに対立しないではいられない」と主張 「デカダンスとの対決」の章でも「デカダンスは、こんにちもはや倫理となることができない」という持論によって安吾を時代遅れの存在と規定 「文学の現状(1947年度の概括)」の章も、高見順と安吾を「急激にマンネリズムに墮して行った」と否定	
1948年6月	高山毅	戦後の文学	単著	(史学社刊)	「主体の回復—1946年の文壇」の章では、「俗悪なるエロチシズムの横行」を嘆き、永井荷風や舟橋聖一の作にはエロシーンが不必要に入っていると批判。織田作之助や安吾、石川淳の作には「エロチシズムに作家として真正面から体当りをしている面が見られ」「文学的にプラスの面があった」と評価。安吾の作品では「白痴」「女体」に注目したと 「個性の開花—1947年の文壇」の章では、安吾作品が「次第に筋書的なものとなり、形象性の不足が目立つて来た」と不満を述べる。「前年度の「白痴」ほどの完結した作品が生れなかつた」としつつも、「石の思ひ」「いつこへ」「母の上京」「恋をしに行く」「道鏡」「二十七歳」「金銭無情」「散る日本」と多数の作を挙げている	白痴 女体 石の思ひ いつこへ 母の上京 恋をしに行く 道鏡 二十七歳 金銭無情 散る日本
1948年7月	坂口三千代	安吾先生の一曰	紙誌	座談	「先生は私に遺言を書いて下さって、自分が死んだら、葬式はだすな、あなた一人で屍体の始末から埋葬もしてどこかの片隅に海中へでも骨をすててくれればいい。遺産はみんなやる。遠りよく恋をして幸福にくらせ、と仰有るのです」とある。1951年6月に尾崎士郎の立ち会いのもと書かれた遺言状の内容を先取りしている。坂口三千代『追憶坂口安吾』(筑摩書房 1995)、『坂口安吾全集』別巻に収録	
1948年7月	山本和	戦後文壇に与ふ—文学と宗教との狭間	紙誌	群像	「墮落論」について「道義や因襲で飾り立てた人間の偽善の表皮を一枚剝いで真逆さまに墮ちてゆく人間を描き、人間は墮ちることによって人間になると宣言する。この思想は、宗教的見地からいつても「常に繰返して罪人にして且つ義人」(ルター)といふ定式の一環を強調するものとして極めて感銘深いものがある」と宗教との共通性を指摘して評価。「どつしりした、坐つた人間本性の把握がある。宗教も現実の人間を問ふ限りでは、先づこの墮落人間を自己のうちに見出しておなければならぬ」と宗教界へ注意を促し、同じテーマが戦後派作家たちにもつながって存在していると説く	墮落論
1948年7月	丹羽文雄	新聞小説について	紙誌	文学界	新聞小説の難しさについて述べ、「かつて坂口安吾君が「花妖」で失敗した。拙いものではなかつたが、強引に新聞小説の型を破らうとして、敗北した。その点では、新聞小説は頑固に急変を嫌つてゐる。「花妖」も雑誌なら、あんなみじめなことにはならなかつたらうが、むしろこの頃の彼の書く調子なら、新聞小説には向くのである」と批評	花妖
1948年7月	大井広介	殿様みたいな坂口安吾	紙誌	東京新聞(31日)	安吾に強く誘われて坂口家に泊まる時、蚊帳は一つもなく、傘もレインコートも何も持たず、「大酔してオダをあげる以外に物欲のないせん人みたいな人物だ」という話。資料探しには殿様のように弟子たちをこきつかった話。大井家が罹災した時など、安吾が大井の妻に砂糖を進呈しようとして、ふだんやらない賭け碁をし、虎の子のラジオを失った話など、1954年9月の「その頃の坂口」で詳しく記述されるエピソード集の原形。1957年刊『バカの一つおぼえ』所収「殿さまのような安吾」は本稿でなく、「その頃の坂口」の改題である	
1948年7月	大井広介	PROFILE 坂口安吾	紙誌	総合文化	安吾はアルコールが入ると語彙が少なくなる話、金銭を不潔物扱いする話、書簡集を死後に出すと大井が言う慌てて焼けてしまったらホッとしていた話など、「その頃の坂口」(1954)「戦時中の坂口」(1955)『現代文学』の悪童たち(1955)「坂口安吾伝」(1968)などで再三触れられるエピソードのいくつかを簡単に紹介	
1948年8月	福田恒存	解説	解説	坂口安吾選集Ⅷ(銀座出版社刊)	『現代作家』に「坂口安吾」としてまとめられた際の8「実験の頂点」の章。安吾作品における観念の実験の一つの頂点として「青鬼の禪を洗う女」を挙げる。また、「金銭無情」や「ジロリの女」は初期ファルス小説の変奏であり、「自分の限界をぬけて」新たな「変貌」を見せつつある「危険」で「苦しげ」な作品だが、これを軽薄だの居直りだのとか見られぬ読者の目をふしあなと断じる	青鬼の禪を洗う女 金銭無情 ジロリの女
1948年8月	十返肇	文芸時評—批評の不潔俗悪さ	紙誌	早稲田文学	「感想家の生れるために」の中で「文芸時評はない方がよい。下品で、不潔俗悪で、百害あるのみだからである」と語った安吾の弁を逆手にとり、下品な批評を書かせる作品が悪いのだ、と居直る。「ジロリの女」についても「自棄とハッタリの混合である」と酷評	感想家の生れるために ジロリの女
1948年8月	丹羽文雄・福田恒存・矢内原伊作	実存哲学と小説の問題	紙誌	早稲田文学	丹羽が「坂口はなんか説教じみて来ている。作品でどなりつけるようになっていた。これは危ない」と述べ、「ジロリの女」も「説教型ですよ」と批判。「通俗と変貌」とで文学者失格のように批判された丹羽は、安吾を仇敵と見ていたのか。「説教型」の説明がないため意図が伝わらず、他の2人からはスルーされている	ジロリの女
1948年8月	檀一雄	文芸時評(上)仮構の人生	紙誌	世界日報(23日)	太宰の死に関する多くの記事のうち「安吾の「不良少年とキリスト」ばかりが抜群である」と述べ、同時代に「安吾級の文士」が10人もいれば「その心意気に於て、唐代の文運隆盛の日と比肩出来るかも知れない」と讃える。作家は売れっ子になると「得意や泣き所に局限された仮構の人生に足を取られる」危険があると言い、安吾が太宰の急所と指摘したのも近年のそういう傾向だったと。しかし安吾だけはその危険を吹き飛ばすように「雑多な座談会出席、将棋、野球観戦記等々」を行う、その「自己活動術にかけて氏はおそらく天才を称し得る最も壮烈な戦闘家である」と述べる。小林秀雄との対談が面白いのもそれが所以とする	不良少年とキリスト 対談「伝統と反逆」
1948年9月	原二郎	「不良少年とキリスト」を読んで坂口安吾に駁す	紙誌	時代	「不良少年とキリスト」について、「いや痛快、痛レツ。最近これ程愛情のこもつた文章を読んだおぼえがない」と褒めたあと、太宰の自殺は肉体の虚弱からではなく「生き抜く意志が虚弱」だったからと駁す。また、「フツカヨイ的に死んだ」という表現も納得できないとし、太宰は文学に真剣だったと駁す。やや筋違いな反論	不良少年とキリスト

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1948年10月	郡山千冬	解説—鬼面楚歌	解説	風と光と二十の私と(日本書林刊)	「エロ文学」だのサルトルとの類比だの世間が安吾作品を論じる際のレッテルを列挙・糾弾した上で、「黒谷村」を「一篇の抒情詩」「青春の詩」と呼び、「孤独閑談」は「ドンキホーテ性を帯びてゐる」などとユニークな解説を試みる。「風と光と二十の私と」については、「日本の小説の中の自然描写といふ代物は、退屈で困るが、この作品の中の自然はいい」と賞讃。『坂口安吾研究』Iに再録	黒谷村 孤独閑談 風と光と二十の私と
1948年10月	中島健蔵	坂口安吾と大岡昇平	紙誌	東北文学	戦前の『作品』誌に安吾と大岡が共に書いていた話。安吾は「創作を第一義としている」が、本質は批評家、特に「人物批評」なので、「織田信長」など「人物論だけでできている小説だと読み解く。また、安吾はデビュー作「木枯の酒倉から」以来その本質は変わっていないが、大岡は大きく変化、「生長した」という。戦争体験の奇烈さが作品に生々しさを与えた	織田信長
1948年10月	小原元	批評の情熱	単著	(雄山閣刊)	「墮落論の虚偽」の章で、「人間冒とく他のなにものでもない」とおきまりの左翼流安吾否定を繰り返す。「かれらはたたかいをさせている」「ヤミ酒をのみやみ女をいだし、そういうおのれの姿態に恥(ママ)らういささかの苦惱もない」と	墮落論
1948年10月	田村泰次郎	肉体の文学	単著	(朝明書院刊)	「青春交友録」で、『桜』同人たちとの交流を回想。安吾が矢田津世子に恋していたことは皆知っており、河田誠一が「矢田さんといふのは、案外ナイヴのひとつだよ。安吾と結婚しませんかといつたら、耳を紅くしたよ。まだ女学生みたいなどころがあるね」と田村に語っていたという。「その河田の説では、安吾がはつきりしないのだといふのだつた。坂口は、案外、彼女のあの構えたやうなつめたさをふみこわしてみたいといふ焦燥に駆られたのかも知れない」とある	
1948年10月	平野謙	解説	解説	戦後文芸代表作品集 創作篇(黄蜂社刊)	「道鏡」について「単なる歴史の新解釈にはをらず、作者その人のユニークな人間観・女性観・家庭観を紙背にうきださせた大佳作」と評価。	道鏡
1948年10月	宇野浩二	小説の文章	単著	(創芸社刊)	「坂口安吾」の章で、「黒谷村」の一節を引用して「坂口の小説(あるひは作風)は、このじぶんから、すでに、奔放なところがあつた」とし、「牧野の作品の影響を受けてゐる」と断定(安吾自身は当時まだ牧野作品は読んでいないと書いている)。続いて「竹藪の家」と「白痴」の各冒頭を引き写し、16、7年前の作と「それほど変わつてゐない」が、「文章だけで云つても、ひきしまつてゐる」と述べる。「このごろ書きすぎ」のためか「ひきしまつて」ゐないのがおほい」とする	黒谷村 竹藪の家 白痴
1948年11月	十返肇	坂口安吾論	紙誌	文芸丹頂	1947年5月の渋川驍の諸論と同一の視点で「墮落論」の言葉尻をあげつらい、「多くの日本人にたいする侮蔑であり冒涇」と完全否定、「正しい墮ち方」など予め決定して置いて墮ちるなど「いささか世を舐め人を馬鹿にした墮ち方ではなからうか」と罵倒する。小説については、能力に乏しく「観念的であることが致命的な欠陥」とし、「頹廢の愛欲図絵を体当り的に書く」投げやりな作品ばかりで、ときどき作風を変えて「気楽な」自伝的作品を書くが、そこにも「未来への道がいささかも示され象徴されていない」と、ほとんど人間性の否定に向かう論調。十返肇『文壇と文学』(東方社 1954)、『坂口安吾研究』Iに収録	墮落論 白痴
1948年11月	キクチ・ショーイチ	『墮落論』その他	紙誌	思想と科学	「墮落論」を「浪花節」の文章とけなし、その「語るともうたうとも口説くともつかぬあの独特な調子との類似を思わせる」と皮肉を述べる。「白痴」「女体」「道鏡」については「いずれもきわめて観念的に肉体と精神とを弁別する作品しか書いていない」と批判。菊池章一『作家・批評家』(安芸書房 1949)に「坂口安吾」と改題して収録。『坂口安吾研究』Iに再録	墮落論 白痴 女体 道鏡
1948年11月	江戸川乱歩	“不連続殺人事件”を評す	紙誌	宝石	「不連続殺人事件」を「純文学畑の作家の探偵小説として劃期的の本格作品で」「我々探偵作家を瞠目せしめた」と評価。「トリックに於ては内外を通じて前例のない新形式が考案されていた」と賞讃。この乱歩評が探偵作家クラブ賞受賞に大きく影響した。ただし、「サスペンス不足」が最大の難点とし、「一種のファーストだから現実感重視されていない」ことを考慮にいれても「殺人への恐怖」や「異様、不可思議な感じ」がないことに「大きな不満がある」と述べる。江戸川乱歩『幻影城』(岩谷書店 1951)、『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』、『坂口安吾選集』8(講談社 1982)に収録	不連続殺人事件
1948年12月	福田恒存	解説	解説	白痴(新潮文庫)	非常に詩的な表現で安吾の基本姿勢を誼いあげた観念論的な解説。「現実と観念とのギャップ」を感じすぎるゆえに何ものとも妥協しえない徹底した「ロマンチスト」であると安吾を規定。従来の私小説家たちが「虚栄心や下心」で「処世術に墮した小説しか書けなかったのに対して、安吾はそれらすべての「処世術をぶちこはしてみたいのである」と説く。「男女の関係でも、精神と肉体との対立を妥協のうちにうやむやにしておくこと」をしない。「精神の純粹熾烈な発光に陶醉し感動したいといふ、その一事のために」と、福田自らの夢を語るように書きつける。『日本文学研究資料叢書』石川淳・坂口安吾』に再録	白痴 いずこへ 外套と青空 私は海をだきしめていたい 続戦争と一人の女
1949年1月	花田清輝	動物・植物・鉱物—坂口安吾論	紙誌	人間	大井広介の花田評に対する反論の形で進む。「芸術即実生活という、いかにもモラリストらしい」安吾の信条に対して「すこぶる懐疑的で、実生活では「善良な一市民にすぎない」安吾が、「暴力によつて」転向せざるをえなかった芸術家たちを「みくだしている」のを批判。もつとも、安吾作品に対する評価は低くなく、全作品に「かれの魂と肉体との分裂にたいする慟哭や自嘲や絶望」を感じ、むしろファルスの分野でこそ、センチメンタリズムを排した「芸術の極意に達すること」が可能かもしれないと説く。「白痴」については、「そこには、白痴の女など、少しも描かれているわけではない。われわれの眼にうつるのは、焔につつまれてのたうちまわっている坂口の肉体だけである」と評価。花田清輝『二つの世界』(月曜書房 1949)、『現代日本文学大系』77(筑摩書房 1969)、『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』などに収録	白痴
1949年2月	中島健蔵	解説	解説	現代日本文学選集4(細川書店刊)	「白痴」について「愚劣を意識する人間は、自分が、全く白痴と同格であると認めなければならなかつた」と要約。最後まで「彼はなお白痴をふり切ることができない。そして、これから先のことは、全く考えつかない」という作者のスタンスについて「アプレ・ゲールの歴史的なずれ」と冷たく批判して終わる	白痴

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1949年2月	亀井勝一郎	モラルの探究	共著	新芸術家講座1 小説篇(文芸社刊)	「墮落論」について、「宗教とか道徳とかは必ずそれ相応の仮面をでつちあげ易い。偽態をつねに伴ふものだ。さうした偽善性、日本的バリサイ気質に対して、坂口の「墮落論」は一の反逆である」「新しいモラルの為には必ずかうした破壊工作が必要なのである」と的確に批評。ただし、安吾の小説では「墮落論」を「肉化し描きあげるところまで行つてゐない」と不満を述べる	墮落論 白痴
1949年3月	江戸川乱歩	幻影城通信24—坂口安吾君の評文について	紙誌	宝石	安吾が「刺青殺人事件」を評すの中で、新人島田一男の「古墳殺人事件」について中傷に近いけなし方をしたのに対し、真剣に怒りを表明した文章。「あの「古墳」評は探偵小説そのものに寄与する所もなく、評された者は勿論、批評者自身をも傷つける文章であつたと思う」とある。江戸川乱歩『日本探偵小説事典』(河出書房新社 1996)に収録	「刺青殺人事件」を評す
1949年3月	大井広介	神様失格	紙誌	新小説	志賀直哉の「太宰治の死」を「実に厭らしい文章」だつたと酷評。十返肇の「坂口安吾論」にも言及し、「坂口にアルチザンの商才がないのは」異論ないとしながらも、「花妖」の連載中止まで「商才」のせいにするなら「十返の鑑賞眼たるや、『姿三四郎』『橘や』の愛読者とレヴェルを同じくすることにあひなる」と批判。そもそも「読まずにものを云ふのは彼の悪い性癖である」と断じ、安吾のバックアップをしている	花妖
1949年4月	無署名	坂口安吾氏自殺未遂	紙誌	世界経済新聞(7日—発行は6日)	「執筆不可能を声明しかねて東大付属病院の病床にあつた戦後肉体派の作家坂口安吾氏は五日夜発作症状を起し三階からとび下りようとしたところを抱きとめられた、服毒のうえ投身自殺を図つたものとみられる」というデマ記事。『評伝坂口安吾』に全文引用	
1949年4月	無署名	ヒロポン中毒—坂口安吾氏発狂説	紙誌	新夕刊(8日—発行は7日)	「去る四日夜病院の窓から発作的に飛び降り自殺しようとする(脱字ママ)衝動にかられるようになりしばしば附添いの家族に阻止されるという始末にまで悪化した(略)アドルムの服用量を減らしたが三月二十七日夜一寸した原因で再び量を増し意識にも多少の混乱を生じ初め歩行も不確実になり現在他目にも悲惨な精神不安状態に陥入り続けている」というデマ記事。伝聞の日付がすべて2カ月ずつずれており、つじつま合わせの捏造が行われている。『評伝坂口安吾』に引用	
1949年4月	無署名	コラム「手帳」	紙誌	時事新報(8日)	『世界経済新聞』の記事に触れ、「ところで事実、当の安吾センセイの病室は半ば地階にあつて飛降り向きにできていないばかりか、窓には太い鉄棒がはめてある、そしてご当人はこのところ連日後楽園球場にあらわれて職業野球に熱中、顔もまっ黒に日焼けして担当の千谷七郎外来長は「大丈夫、こゝ二三週間で退院できます」と保証している」とある。『評伝坂口安吾』に全文引用	
1949年4月	無署名	コラム「深標」	紙誌	日本読書新聞(13日)	「最近編集者仲間や作家間において坂口安吾異常? のうわさがとんでいる／＼過日も一編集者氏がその寓居を訪うと“ちよつと待つてくれ”とて庭でバットを振りふりウインドウをつづけること時余に及び、ついに“用件”を切りだせぬまま引返してきた(略)平素御愛用のヒロポンとスミイン剤とアルコールの度がちと過ぎたんじやあなからうかとシンパイされると」とある。『評伝坂口安吾』に全文引用	
1949年7月	江戸川乱歩	続・一般文壇と探偵小説	紙誌	宝石(臨増)	純文学作家の探偵小説としては谷崎・佐藤春夫に続く「三番目の作家」と評価し、「ブレイク、ポストゲイト、ワイルドなどに見る英米本格派の新傾向と一派の通ずるものがある」と論評。1947年発表の正篇と共に江戸川乱歩『幻影城』(岩谷書店 1951)に収録	不連続殺人事件
1949年7月	花村燹	解説	解説	日本小説傑作全集1・昭和23年前期分(宝文館刊)	「アングウ」について「もつとも坂口安吾らしからぬ外貌を持つた小説である。しかし、幾つかの逆説的な墮落論を書いた坂口氏の曲者の真顔をのぞかせたやうな」趣があり、「『出家物語』(オール讀物)も傑れてゐたが、私としては進んでこのほうを選んだ」と評価	アングウ 出家物語
1949年7月	無署名	人物立看板—坂口安吾	紙誌	座談	無署名だが安吾の作品にも生活にも詳しい編集者の筆と思われる。デマの是正を目的として東大病院神経科に少し入院した事実を記し、「昨年、彼の家を訪ねた編輯者が帰途、どぶの中に落ちた時、たつた一着のスズンを貸して、外出出来なかつたといふ位」物欲なく貧乏生活に甘んじていると書く。どぶに落ちたのは本誌『座談』発行人だつた池島信平のこと	
1949年8月	無署名	社中日記	紙誌	文藝春秋	「文学界」同人チームと「本社」老童チームで野球対戦した記事。編集者は池島信平。東京駅裏東鉄グラウンドにて午後3時に試合開始、「敵のバッテリーは、石川達三、河上徹太郎の両氏。一塁井上友一郎。二塁坂口安吾、三塁今日出海、遊撃舟橋聖一、外野は臨時加入の北条誠、中堅新田潤、右翼田村泰次郎の諸氏」とある。「本社」チームは、鷲尾洋三、庄司淳、沢村三木男、千葉源蔵、鈴木貢ら。「ゲームは俄然、一進一退のシーソーゲームとなり途中から永井龍男、獅子文六も参加、「坂口安吾氏の再度に互るスライディングキャッチ」などあり、引き分けに終わったという。後年の文春ホームページの記述では、安吾は先発ピッチャーで四番打者だつたといひ、外野を守っている写真も載せている。半藤一利氏の記憶では、安吾はサードだつたという	
1949年8月	無署名	坂口安吾の発作再発	紙誌	朝日新聞(8日)	「数日前から、家中を発作的に激しく暴れまわり、アドルム中毒らしい症状を呈していたが、七日夕方から池上警察署で保護している」とある。『評伝坂口安吾』に引用	
1949年9月	檀一雄	現代作家寸描集—坂口安吾	紙誌	風雪	安吾のことを「自由精神の把持持久について、この位神経質なる豪傑は珍しからう」と評し、「世の精神主義者共に大砲をぶつ放す精神主義者。形式美学など眼中になく、芥川龍之介なぞこの先生と同時代に生れなくて全く合せだつた」と述べる	
1949年9月	尾崎一雄	なめくぢ横丁	紙誌	群像	かつて安吾と同人仲間だつた高橋幸一が「暗い青春」で自分のエピソードを書かれたが、事実と違ふと不満を漏らしていたエピソードあり。『なめくぢ横丁』(中央公論社 1950)、『芳兵衛物語』(旺文社文庫 1976)などに収録	暗い青春
1949年10月	尾崎一雄	大観堂の話	紙誌	別冊小説新潮	『現代文学』発行元の大観堂主人が、父親の葬儀のさなかに安吾が金を借りた話など語り、安吾、尾崎一雄、檀一雄が「三大豪傑」だと言つてた話が出てくる。『なめくぢ横丁』に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1949年11月	本多秋五	解説	解説	新日本代表作選集1(実業之日本社刊)	「白痴」について「空襲の凄惨な描写と、烈しい体当りのタッチと、遅疑をゆるさぬ「感情の水位」の高さが、読むものを圧倒する「戦後第一等の傑作」と評価。「作者の内懐をうかがはせぬ殺戮的な文体は、これまた戦後の文学に大きく波及したという。「生命の完全燃焼を欲する願ひとミミチイこの世の掟との果てしない戦ひ」が「坂口安吾のほとんど唯一の主題」であり、「『墮落論』『続墮落論』はこの作品の直接の解説」と説く	白痴 墮落論 続墮落論
1949年11月	石上良平	優等生の試験答案	紙誌	図書新聞(1日)	「不連続殺人事件」について、「実に多数の人が短い時間の内に死んでゆく」が「何ら深刻とか残酷とかいつた感じを与えられません」と皮肉っぽく述べる。あれほど綿密な殺人計画を立てなくても、もっと楽に目的は達せられたはずで、つまり犯人は「利口馬鹿」で「合理的精神に欠けて」と批判。「優等生の試験答案」のような筋立ても不自然だという	不連続殺人事件
1949年12月	福田恒存	知識階級の敗退—1949年の文壇的考察	紙誌	人間	安吾のことを「知識階級の精神主義を痛罵する精神主義者」と讃え、連載中の「火」について、「人間の可能性を探らうとする意図」を見、「坂口安吾は知識階級の文学と大衆の文学とを結合させるといふ難事に、あるいは成功するかもしれませんが。あるいはひどい失敗をするかもしれませんが、ともかく真の文学的冒険をしてゐるといふ点では、かれが第一でありませう」と述べる。『福田恒存全集』2(文藝春秋 1987)に収録	火
1949年12月	檀一雄	小説坂口安吾	紙誌	小説新潮	井伏鱒二に紹介されて出逢ってから、蒲田の坂口家や大井広介宅などでの愉快的思い出、新潟を案内された話、入院前後のようすなど、豪放で友情に篤い安吾のさまざまなエピソードを小説の形で描いたもの。親友にしか見せない安吾のナマの姿がかいま見える。安吾没後の1955年にも同題で続稿を執筆、同年4月の「安吾・川中島決戦録」を第3部として、3篇をまとめて檀一雄『小説坂口安吾』(東洋出版 1969)に収録。『坂口安吾研究』Ⅱ(冬樹社 1973)には第1、2部のみ収録	
1949年12月	白石潔	行動としての探偵小説	単著	(自由出版株式会社刊)	「坂口安吾氏「復員殺人事件」」の章あり。連載2回めの時点での批評だが、前作「不連続殺人事件」よりも「フェアプレイ」の精神において成長していると評価。探偵の巨勢博士だけは「バツとしない」が、「登場人物は、殆んどが見事に人間として描かれて」おり、「冒頭展開される十数の人物のパズル的な登場は、出し惜しみをする日本探偵小説の多いなかにあつては大変に大胆な行きかたで、坂口探偵小説の幅の広さがうかがわれる」と批評	復員殺人事件
1949年12月	青山光二	旅行者	紙誌	新小説(翌年6月まで連載)	織田作之助の盟友による織田の伝記小説で、1946年11月22日の安吾・太宰・織田・平野謙「現代小説を語る座談会」終了後の、バー「ルパン」でのやりとりが生々しいタッチで描かれている。青山光二『青春の賭け』(現代社 1955、のち中公文庫)に収録	現代小説を語る座談会
1950年1月	伊田和一	坂口安吾氏に挑戦する	紙誌	困碁春秋	伊田はかつての安吾の困碁仲間で四段の実力者。1年半前、浅草のお好み焼き屋「染太郎」で久々に逢ったら「態度や風貌は少しも変りがなく「よう、しばらく」と云ふ口調も昔のまゝ」だったという。「演劇プロデューサーである私に「大衆を尊敬しなければいかんよ。プロデューサーが教祖になつたらおしまいだぞ」と、幾度も云はれました」とあり、また、菊富士ホテル時代に安吾の「二三の短篇が芥川賞の候補に上つた事を私がよるごとと、「今さら芥川賞の候補にするなんて無礼だ」と昂然と云ひ放つた」昔話を話題にし、「あの頃のあなたの方が僕は好きだ」と何げなくつぶやくと、安吾は急に落ち込んで「俺も好きだ、拾年前の俺の方がりつばなのに世間では今の方が偉いと思つていやがる」と言った。碁に話題を転じたら、安吾が呉清源と打った話になり、「呉清源がね僕に押されて真剣に考へ込んだんだぜ、君」といばる。さらに、伊田となら三子置いて戦えば勝てる、「僕は秘蔵のライターを賭けるよ」と言うので近く対戦することになったが、安吾はそれきり入院治療に入り、果たせていないとある	
1950年3月	河盛好蔵	文芸時評	紙誌	朝日新聞(26日)	「水鳥亭由来」について、「快作である。作者の生き方の一つの傍証になるような感興にあふれたもので、健康な笑いとボン・サンスを感じさせる」と高評価	水鳥亭由来
1950年5月	川端康成	編輯者の言葉	解説	日本小説代表作全集21(小山書店刊)	「坂口安吾氏の「釣り師の心境」は随筆風な小品、作者の人の厚みからユウモアが出ている」と解説	釣り師の心境
1950年5月	荒正人	解説	解説	現代日本小説大系・別冊1(河出書房刊)	「白痴」を「モラリスト」の文学と見、作品に漂う「淡い虚無感」も「裏返しされた倫理意識」と捉える。「道鏡」については「歴史の現代的解釈」などといわれることに異議を唱え、「現代とちつとも区別する必要のない濁世のなかで」「だまつて己れの道のあるいてゆく自然人の風半に心打たれる」と評価。「暗い青春」には「鬱屈した、青い憤怒の表情さへ漂つてあるベシミズム」を見、「風と光と二十の私」とは「哀しい音色」と「一抹のペイソス」を感じるが、「あまりにもモラルを意識してゐるから」戦前の安吾が求めていたであろう「モラルを無視したところに」生まれる「理想の文学」とは「大分喰ひちがつてくるやうでもある」と述べる	白痴 道鏡 暗い青春 風と光と二十の私と
1950年5月	亀井勝一郎	大凡俗への努力	月報	現代日本小説大系・別冊1(河出書房刊)	「坂口文学の魅力の一つは、着想の妙を得た文明批評能力である」とし、「エッセイをかくとき、イマジネーションがふしぎに奔放になり、豊かにもなる。私は詩人を感じる。即興的で諷刺的な詩人を」と批評。また「作品の柄は大きい」として「堅固な建物の隣りにバラック密集地帯があると云つた風の文体」とする	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1950年6月	佐々木基一	坂口安吾	紙誌	人間	近作の『火 第一部』や「水鳥亭由来」などの小説を「造形的に円熟して来つつある」と評価。逆に『安吾巷談』や『我が人生観』などのエッセイは、かつての「迫力に乏しい」「極めて常識的であり、いい気なもの」になってきたと批判。「エッセイと小説との本質的な差別を付けなかった彼の文学に、いつの間にか二つのジャンルの分離が起って来つつある」が、それをむしろよいことかもしれないと考察。佐々木基一『現代作家論』、『坂口安吾研究』Iに収録	火 水鳥亭由来 安吾巷談 我が人生観
1950年6月	大井広介	志を得ざる文士	紙誌	新潮	日本の出版事情では、小説で生計を立てるのは困難という話題の中で、安吾の「高見君の一文に関連して〔俗物性と作家〕」を紹介。1948年7月の「殿様みたいな坂口安吾」の話題も再び紹介している	高見君の一文に関連して〔俗物性と作家〕
1950年6月	平野謙・高見順・宇野浩二	創作合評―野放図について	紙誌	群像	平野と高見が「水鳥亭由来」について否定的に批評。平野は「これは一種の滑稽小説で、ユーモア小説というもの現代文学にはほとんどないから、こういう作品は大いに存在価値があるわけだけれど、もっとサラリと書いてもらえないかな」と批判し、高見は前半は面白いが後半で「親爺がまともになって」失速したとみる。『創作合評2』(講談社 1970)、『坂口安吾研究』Iに収録	水鳥亭由来
1950年8月	亀井勝一郎	文芸時評	紙誌	東京新聞(28～30日夕)	「巷談師」について「片仮名まじりの単刀直入の文体を発明したところ」を魅力であるとし、娯楽奉仕の覚悟をもって書かれた「悲しい私小説」であると批評	巷談師
1950年8月	無署名	波紋を呼ぶ古橋の千五百欠場	紙誌	夕刊読売(5日)	「マーシャルとの一戦／約束して招待／水連、作戦ひたかくし／全世界が注目／マーシャルから逃げたか古橋？」という見出しの記事で、「ファンの声」としてサトウ・ハチロー、徳川夢声らの談話とともに「坂口安吾氏談『千五百』に古橋を出さなかったのは日米戦という小さな対抗意識にとらわれすぎてレコードを争うというスポーツ本来の目的を忘れたものだ」と不満を感じた』とある	
1950年9月	青山光二	(『火 第一部』評)	解説	坂口安吾『現代忍術伝』広告頁(講談社刊)	『火 第一部』について「坂口氏の作品中随一の大ロマンに発展すべきものたるは疑いない」と賞讃。「例によつて小説の骨法を無視して野放図極まり、細部を略してスピーディである。特筆すべきは作中京都弁の表現」とも。『現代忍術伝』巻末に付された広告ページに掲載された。朝日新聞からの転載とあるが、「火」連載完結から当月までの朝日新聞には見つけられず	火
1950年10月	無署名	(記事)	紙誌	スポーツニッポン(7日)	「安吾巷談」の間違ひと思われる箇所を列举するが、特に留意すべき指摘はない	安吾巷談
1950年12月	荒正人	戦後の文学	共著	昭和文学十二講(改造社刊)	安吾・織田・太宰・石川淳・高見順・伊藤整・三好十郎・田村泰次郎らを「当時新戯作派と一部によばれていたひとびと」として、「旧きものへの全否定、混乱のなかからの生誕への希望、すべてこういった意欲がこれらの作品にはみなぎっていた」と批評。しかし徐々に「倫理的抵抗」の側面は薄くなり、「就中、坂口安吾とか、織田作之助などにこのような傾向が色濃くあらわれた」と指摘。1952年、『昭和文学研究』(塙書房)と改題して再刊された。1952年6月および10月発表の論文と同題だが、内容はそれぞれ別	墮落論
1951年1月	大岡昇平	放浪者坂口安吾	紙誌	文學界	「白痴」について「一種の傑作である」とし、「壊れた都会は、都会でもなければ、田園でもない、さういふ風物的な意匠を脱した、いはゞなまの自然の中に坂口の放浪は初めてところを得た感じである」と評価。エッセイについては「教祖的であり「独断的」だが「丸太棒が」「どかりと一本転がってある、さういふ孤独な安定感」が「大衆的人気を博した所以」であろうと批評。「道鏡」など歴史小説は「一方的な解釈」と否定。「火」は「彼のロマンチズムに禍ひされて、人物が歪んで見える」など長篇はすべて「失敗」、「坂口の小説に欠けてゐるのは、他者を造型する動機である」と断ず。「坂口安吾とは古い知合ひである」と書き出すが、友情は感じられない。『坂口安吾研究』I、『文芸読本坂口安吾』に共に発表月誤記で収録。大岡の著作集では「坂口安吾」に改題、1957年3月の「京都の頃」と合体させる場合もある	白痴 道鏡 火花 妖 街はふるさと
1951年2月	檀一雄	巷談師坂口安吾	紙誌	文藝春秋臨時増「人物読本」	ファルスの口調で安吾の人となり語る。「非常に細心鋭敏な人だ。人に対する思ひやりなどいふものも度外れてある」が、「世の精神主義者共に大砲をプツ放すと云つた、奇つ怪な精神主義者」でもあり、「恋愛を語る時に、処女の夢見る如き、可憐で理想化された、精神的恋愛を強調する」と説く。安吾発明のガウンやズボンのエピソードもあり。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾選集』11(講談社 1982)、『坂口安吾全集』11(筑摩書房 1998)月報に収録	
1951年3月	浦松佐美太郎	『安吾巷談』を選ぶ	紙誌	文藝春秋	第2回文藝春秋読者賞で、読者の票が多かった10篇の中から選考委員が「安吾巷談」を選んだことについて「拾えば欠点はいくらもあるが、昨年のジャーナリズムに、清新なものを齎したのは事実であり、魅力のあったことも確かである。この「巷談」を企画した編集の手腕にも、いい点を付けてよからうというのが、委員の意見である」と説明	安吾巷談
1951年3月	河上徹太郎	「安吾巷談」のスタイル	紙誌	文學界	「安吾巷談」の獨創性は、その文体よりも「安吾といふ個性が体あたりでぶつかつて」生まれた「大胆率直な論理の移行」にあり、模倣できないものと評価。「墮落論」については「彼はこれが熟するまでに長い放浪の時代を経てをり、しかもこの放浪によつて、並々ならぬ精神的修業を積んでゐる。それだから彼の覚悟は不動であり、その文章には不屈の断定があつて、余人の模倣を許さないの」と評価。「白痴」については「ドイツ観念論哲学の匂の濃い」ハウプトマンの小説と「そのピンと張りつめた情感の緊張と緊密の点で奇しくも共通したものがあるのに驚いた」と批評。戦前、牧野信一を通じて知り合い、共に飲み歩いた当時を追懐する筆に生彩がある。『坂口安吾研究』I、『文芸読本坂口安吾』、『坂口安吾選集』11(講談社 1982)に収録	安吾巷談 墮落論 白痴

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1951年3月	匿名(乙)	闘牛場を縦横に暴れまわる牡牛—坂口安吾著『安吾巷談』	紙誌	不明	坂口家に保管されていた新聞切り抜きで、紙名は不明。「『安吾巷談』の面白さは有無を云わさぬ判断の明快なることにある。文章のスピードがその効果を助ける」と批評、「縦横に暴れ回る牡牛の壮快さを感じた」という。その魅力は「ルポルターージュの面白さではなく、坂口安吾の意見の面白さだ。そこに明確にとらえられているのは現代の世相ではなく、人間心理である」と述べ、その観点から「東京ジャングル探検」や「田園ハレム」などルポの面白さをもつ篇は評価していない	安吾巷談
1951年4月	無署名	坂口安吾も大穴に	紙誌	新聞(9日)	坂口家に保管されていた新聞切り抜きで、紙名は不明。第2回伊東競輪最終日の4月8日、9420円の大穴が出、「二、三人の幸運者の中に伊東市在住の文士坂口安吾さんのほくほく顔も見えた」とある	
1951年5月	寺田透	戦後作家論6—坂口安吾	紙誌	近代文学	対象の作品が手もとにないから記憶だけで批評すると宣言して始まる極めて不誠実な論文。「墮落論」について「日本人の現状の正当さを証明しただけ」のもので、もてはやされた理由がわからないと批判。「戦後の無秩序を擁護するやうに見えながら」「かれの人間観も、はなはだしく古典的」で、「人間の俗悪と愚劣の鑑定人」にすぎないと説くなど、敵意と偏見に満ちている。寺田透『をりふしの批評』(弘文堂 1960)に発表年月を1956年8月と誤記して収録	墮落論
1951年5月	林房雄	匿名批評 東西南北—白井明遺稿集	単著	(創元社刊)	林房雄が1947年7月から1950年10月まで白井明の筆名で『読売新聞』に発表した匿名コラム集。「サルトルの泡」の項で、安吾のことを「日本サルトル賞受賞者」と茶化しながら「教祖の文学」を評価、「日本文壇に実存する多くの邪教性清算の口火となつてくれる」のを期待する。「政治と文学」の項では、中野重治が「北原武夫とか坂口安吾とかいふ、まだ小説書きとは言へぬ程度のゴミのやうな作家」と書いた話を紹介し、「ゴミのやうな政治屋の放言」とやり返している	教祖の文学
1951年5月	無署名	コラム「青鉛筆」	紙誌	朝日新聞(29日)	5月26日朝、安吾の留守に「税務署員が五人も押しかけ」家財を差し押さえたという話題。「滞納ナント百五十万円余。「全部差押えたってキミ、十万円にもならんヨ。オレの勝ちサ」と先生意気揚々」とある	
1951年6月	匿名(七杉子。のちに大宅壮一とわかる)	安吾の税金闘争	紙誌	東京新聞(28日)	「放射線」欄にて、「負ケラレマセン勝ツマデハ」について「フザケタ巷談調」と罵倒し、「現代の流行作家」が「月収の何分の一にしか相当しないやうな家財道具しかもたないということは、滞納というよりはむしろ計画的な脱税と見られないこともない」と批判。『大宅壮一選集』9(筑摩書房 1959)に収録	負ケラレマセン勝ツマデハ
1951年7月	大宅壮一・中島健蔵・野沢隆一・荒垣秀雄	当世人物案内—日本を動かす100人	紙誌	展望	発言者を明示しない話者4人による放言集。安吾については、「アレは徹底常識人だ」といい、「常識的な男がいかに非常識にみせるかの努力をしてゐるみたい」と笑うのみ	
1951年7月	匿名(小原壮助)	安吾の文体の魅力	紙誌	東京新聞(26日)	安吾の文体は講釈師の話方に似ていると批評。石川淳、大井広介、檀一雄なども同様であり、古くは鴎外にも似た文体の短篇があるとして一文を引用。『坂口安吾全集』12(1999)月報に収録	
1951年8月	廉隅伝次	坂口安吾氏に与う	紙誌	ファイナンス・ダイジェスト	「負ケラレマセン勝ツマデハ」に対する東京国税局徴収部長・廉隅(カズミ)からの反論。「税に関するかくの如き理不尽な考え方に対しては世間の良識に訴え、カンヤクするところなく、これを粉碎しなければならない」と厳しく指弾する内容	負ケラレマセン勝ツマデハ
1951年9月	大井広介	犯人当て奨励	紙誌	宝石	安吾と同様、探偵小説は謎解きのゲームであるべきと説く。安吾の『不連続殺人事件』の最大の弱点は、探偵が無能で犯人がわかっていながら次々と殺人を起こさせてしまうところだという。大井家での探偵小説犯人当て遊びの常連は安吾、大井、平野謙、荒正人の4人で、檀一雄や長畑一正も何度か参加したらしい。パークリー『第二の銃声』というマイナー作品でやったとき、安吾が珍しく正解して「あれは名作だよ」と上機嫌、乱歩たちとの座談会でもこの小説の話をし、乱歩すら知らぬ探偵小説を読んでいると感心されたとか。中公文庫版『不連続殺人事件』(2024)に収録	不連続殺人事件
1951年9月	無署名	伊東競輪を告発—“坂口安吾捕物帖”	紙誌	夕刊読売(20日)	伊東競輪に不正があったとして、安吾が告訴した記事。「こういうはっきりした物的証拠のあるいかさまレースも珍しいので好きな競輪の肅正のためにあえて告発した」という安吾の談話も掲載	
1951年9月	無署名	坂口安吾、伊東競輪を訴う	紙誌	朝日新聞(21日夕)	伊東競輪に不正があったとして、安吾が告訴した記事。「競輪はこのまゝではボスどもの食べ物にされてしまう。私は振興会をたゞきつづまでこの告訴を取下げない」と述べた安吾の談話も掲載	
1951年10月	サトウ・ハチロー	コラム「見たり聞いたりためしたり」第1997回	紙誌	東京タイムス(20日)	競輪がインチキをやっているのは事実、と前提したうえで安吾を応援。「スポーツマンシップの欠如—安吾さんのいかりは、これから発したのであろう」として、競輪界の大改革をすべきと主張	
1951年11月	佐々木基一	坂口安吾論	紙誌	群像	「風博士」の秘密を解き明かしたい旨を述べながらも「何か風のようなものが猛烈な勢いで駆けて通った、そんな漠たる印象しかもつことが出来ない」と締めくくっている。佐々木基一『昭和文学論』(和光社 1954)、『現代作家論』、『坂口安吾研究』Iに収録	風博士
1951年11月	無署名	新入・旧人	紙誌	改造	税務署との争いや伊東競輪訴訟など、安吾の近況にかなり詳しい人物による、ファルス調の放談。「安吾巷談」や「新日本地理」を「ことごとく推理の面白さ」と呼ぶが、飛驒の巻で「遂には日本武尊と大友皇子と入鹿は同一人物なりと、一人三役という探偵小説得意の手法で推定をくだすに至つた。御愛嬌である」と茶化すあたり、大井広介の文章をほうふつとさせる	安吾巷談 安吾の新日本地理
1951年11月	匿名(小原壮助)	安吾地下へモグる	紙誌	東京新聞(20日)	税金問題と競輪事件を混同している世間に対するの誤謬訂正が主旨。かなり安吾の内情に詳しい人物が書いたとわかる。安吾は「私は地下へもぐらない」を書いてこれに反論した。『坂口安吾全集』12(1999)月報に収録	私は地下へもぐらない
1951年12月	中村光夫	解説	解説	現代日本小説大系54(河出書房刊)	戦前の安吾作品は「概して未熟」だが、「日本文化私観」「青春論」などのエッセイは「時代の復古的風潮を排して、偏見のない合理主義を主張し、戦後の『墮落論』から、現在の独自のエッセイストたる面目をすではつきり見せてあます」と評価。また、小説でも「流浪の生活」に取材した「真珠」「古都」「孤独閑談」などは「異色ある作品」と述べる	日本文化私観 青春論 墮落論 真珠 古都 孤独閑談

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1951年12月	佐々木基一	小予言者とマイナー・ポエトたち	月報	現代日本小説大系54(河出書房刊)	戦争中の「日本文化私観」によって、「彼は予言者としての自信に到達した」と詩的に評価。そしてそれは、かつての「風博士」の裏返しともいえる内容だとい、「極めて独断的な発想」ゆえに「予言者タイプであるが、しかし同時に、芸術家としての彼の弱点も彼が余りに予言者的である点にありはしないか」と論述。1955年9月の再編刊では第56巻に変更	日本文化私観 風博士
1951年12月	無署名	「競輪問題」は不起訴に—坂口氏の不正の主張認めず	紙誌	朝日新聞(7日)	伊東競輪告発について静岡地検沼津支部が調査した結果、不正はなかったと裁定、12月6日に不起訴処分となり、事件決着	
1951年12月	福田蘭童	賭博の仁義	紙誌	サンデー毎日(30日)	安吾の伊東競輪の不正告発を応援する文章。蘭童は安吾、三千代と一緒にレースを見ていたが、蘭童も不正な着順入れ替えがあったとみた。他の観客たちも「不可解なレースぶり」に「不当を鳴らした」という。蘭童は後日また伊東競輪に行ったが、その時も別の八百長騒ぎが起こったという。福田蘭童『海千山千』(創元社(大阪)1953)に収録	
1952年1月	塩谷温	坂口安吾氏に答える	紙誌	歴史	漢学者の塩谷温が愛人晩香の死について雑誌に何度か手記を発表したことについて、安吾は1951年10月発表の「安吾人生案内」6「暗い哉東洋よ」で感想を記した。安吾は相当いたわりもこめて書いたが、その中で、晩香を自殺と推定したこと、塩谷の権威志向が芸者上がりの晩香にとって不幸であったこと、それを「身から出た錆」という言い方で評したことなどに怒りを表明した反論。『坂口安吾研究』Iに収録	安吾人生案内
1952年1月	無署名	近時文壇異聞—安吾イカレルの事	紙誌	白と黒	伊東競輪の不正告発の折、安吾が大井広介の家に逃げ込んだ話をリアルに描写。2台の高級車については、文春の佐佐木茂索から1台回してもらい、もう1台は3万円で購入したと安吾は言ったという。「汽車は危いと思つたのでネ」と。被害妄想が高じて頭がおかしくなっていると書いている。大井しか知らない話なので、大井からの聞き書きか	
1952年1月	匿名(冗談子)	新年早々毒舌御免 羽織袴でタクト振り—坂口安吾調	紙誌	島根新聞(3日)	新派の邦楽演奏会批判。安吾の文体をまねたと称するが、卑俗で悪意に満ちた文章であるため、安吾は2月20日、同紙に「松江市邦楽界に寄す」を寄稿、弱い者いじめはよくないと、やんわり反論した。本記事は『坂口安吾全集』別巻解題に全文引用	松江市邦楽界に寄す
1952年1月	無署名	チャタレイ裁判に判決—傍聴席にきく	紙誌	朝日新聞(18日)	訳者の伊藤整は無罪になったが、小山書店主には罰金25万円が課せられた。安吾の談話として「伊藤君については当然。小山君の場合は販売方法などに責任はあろうが、この刑に価するかどうかは問題だろう」とある	
1952年2月	匿名(冗談子)	坂口安吾氏に答える—冗談に腹をたてる野暮	紙誌	島根新聞(27日)	安吾の反論「松江市邦楽界に寄す」に対する再反論。本記事も『坂口安吾全集』別巻解題に引用	松江市邦楽界に寄す
1952年3月	無署名	坂口安吾 ヒョッコリ桐生に引越す	紙誌	サン写真新聞(4日)	「三千代夫人と引越の片付をする坂口氏」の近影入り、転居おしらせ記事。安吾の談話として「これから群馬の地理、歴史をよく研究して歴史小説でも書きたい」とある	
1952年3月	無署名	坂口安吾氏を歓迎する	紙誌	桐生タイムス(4日)	安吾が桐生に引越して来たことを「近來の快ニュース」と祝い、「文学の領域にだけでも地方分権の情勢を作り出したいものである」と説く	
1952年6月	荒正人	戦後の文学	紙誌	文学	織田・太宰・安吾・石川淳・田中英光・高見順・北原武夫・阿部知二・伊藤整などを「新戯作派」と規定。「屈折した一種の批評精神が共通に見受けられる」とし、安吾については「白痴」「外套と青空」「墮落論」を挙げて「いはゆるデカダンス文学の代表者として迎へられたが、そこには、世間一般の誤解もあつて、かれの文学の基調は、反俗と抵抗であり、むしろ健全な倫理観に裏打ちされてゐた。これは、その後発表された「安吾巷談」のやうな、社会時評のなかにはつきりとあらはれてゐる」と述べる。同年10月および1950年発表の論文と同題だが、内容はそれぞれ別。	白痴 外套と青空 墮落論 安吾巷談
1952年7月	山本健吉・武者小路実篤・渡辺一夫	創作合評—夜長姫と耳男	紙誌	群像	「夜長姫と耳男」について、武者小路が姫の笑顔の意味や耳男がそれに対抗して殺害にまで至る展開が理解できないと批判したのに対して、山本は「姫の笑顔の裏に非常になにか非人間的な残酷さというものが隠されている。結局人間性の非常に稀薄な状態あるいは人間精神というものを純粋な状態にしてしまうと、結局こういう姫の中にあるようなものになるのだ」と解説。渡辺はリラダンの短篇やカミュの「異邦人」を引き合いに、一種実存主義的で「アブノーマルなヴィジョン」が感じられ「非常に面白く」読んだと評価。『創作合評3』(講談社1970)、『坂口安吾研究』Iに収録	夜長姫と耳男
1952年9月	大宅壮一	仮面と素顔	単著	(東西文明社刊)	「坂口安吾」の章で、安吾のことを「もはや作家ではない「巷談師」である」と位置づけ、「それは一種の芸である。文章上のアクロバットである」と批評。半ば皮肉もあり、無頼派の現実否定から自己否定にまで至るラインを、常識家でもあった安吾は「危くふみとどまった」とみる。「負ケラレマセン勝ツマデハ」などは「結局は常識の裏返しにすぎない」とバレてしまうと魅力が失われると述べる	負ケラレマセン勝ツマデハ
1952年10月	荒正人	戦後の文学	共著	現代文学総説Ⅱ(学燈社刊)	同年6月および1950年発表の論文と同題だが、内容はそれぞれ別。これは戦後の代表的な作家の概要をまとめたもの	
1952年10月	無署名	生活と意見(22)作家 坂口安吾氏〔インタビュー記事〕	紙誌	新大阪(6日)	「信長」連載開始の前日に同作掲載紙で行われたインタビュー。近況に加えて、野球、文学、映画、芸術、音楽、舞踊、勝負事、国際情勢に至るまで丁寧に答えている。機関誌『坂口安吾研究』第2号(坂口安吾研究会2016)に初収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1953年4月	水谷準	安吾捕物帖について	解説	明治開化安吾捕物帖1(カバー織り込み)	「捕物帖には三つの要素が必要だ。まず事件が奇抜であること、次にはその解決が合理的であること、そして事件解決に活躍する人物が面白い性格の持主であること」として、「安吾捕物」シリーズは「時代を明治初期にとったが、これは面白い着眼だ。何故ならその頃は戦後のわが現代と有無相通じるものがある、どんな奇抜な事件でも想像し得られるからである。そしてその解決にも、従来の捕物帖に見られない科学的な方法も考えられ、ずっと合理的に運ぶことができる。しかも、記するに勝海舟という時代的な大物を持って来たのだから、まさに三拍子揃ったというべきである」と賞讃	明治開化安吾捕物
1953年4月	大井広介	坂口安吾著『明治開化安吾捕物帖』	紙誌	日本読書新聞(27日)	『安吾捕物帖』第1集についての批評。一般の捕物帖よりも「探偵小説的」、特に「石の下」がそうで、「血を見る真珠」は「シチュエーションの設定に優れている」と評価。ただし「勝海舟の解釈、新十郎による解決という構成」はあまり「生きてはいない」と述べる。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾選集』9(講談社1982)に収録	明治開化安吾捕物
1953年4月	匿名(SUN・E)	影のない男—坂口安吾『明治開化安吾捕物帖』第一集	紙誌	週刊朝日(26日)	「安吾捕物」の初期の「ああ無情」などは「犯罪の筋道だけがゴツゴツ書かれていて、肝腎の登場人物の描写はまことに影が薄い」が、後期の「覆面屋敷」の頃からは「犯罪を中心にして一つの話を書くようになって来ている」点は評価するが、「その代りに構想がスッカリ粗雑になって、タンテイ小説らしい面白味はすっかりなくなってしまう」と批判的に論評	明治開化安吾捕物
1953年4月	佐藤十雨	増補改訂 肝臓先生	単著	(八木書店刊)	「肝臓先生」のモデルである佐藤清一(十雨は号)の小説風随想。尾崎士郎の紹介で安吾と知り合った経緯や伊東での安吾との交流が描かれた「寒雀」の章は『坂口安吾全集』別巻に収録	肝臓先生
1953年5月	江戸川乱歩	探偵小説の五つの型と代表作	共著	別冊石27「探偵小説全書」	「戦後の純探偵小説」の代表作として、横溝正史「本陣殺人事件」、高木彬光「刺青殺人事件」、坂口安吾「不連続殺人事件」の3作を挙げる	不連続殺人事件
1953年5月	中島河太郎	探偵小説素描	共著	別冊石27「探偵小説全書」	戦前から戦後の小説史を文字どおり素描したもので、「不連続殺人事件」については「多数の登場人物の個性が十二分に描かれた堂堂たる本格物であった」と評価	不連続殺人事件
1953年5月	木下順二・椎名麟三・手塚富雄	創作合評—牛	紙誌	群像	「牛」について、椎名が「作者の古代的なものに対するあこがれ(略)の中で「牛」という人物が生きている」と評価したのに対し、手塚は登場人物のほとんどが「何らかの意味で観念的」と批判。ただし「牛」を包む空気には妙に澄んだようなどころがあり「他の人物たちとは「別種の存在であるところがある」と指摘。『創作合評3』(講談社1970)、『坂口安吾研究』Iに収録	牛
1953年6月	スカラムーシュ(花田清輝)	一流の人	紙誌	河北新報(14日)	発表時は匿名で「スカラムーシュ」と署名。「信長」について、「史料はすっかり坂口のものになりきっており」「近ごろまれにみる男性的文学である」と高評価。信長と拮抗する人物として道三をクローズアップした点が面白く、「この二人のあいだに行われる火花をちらすような虚々実々の戦い、そこからうまれてくる一種異様な友情—それがこの長篇のテーマである」と批評	信長
1953年6月	井伏鱒二	[坂口安吾『信長』推薦文]	解説	坂口安吾『信長』再版(筑摩書房)	6月再版のオビに刷られた推薦文。「信長の精緻で大胆、着想の斬新、判断の正確、行動は電光石火の特長が躍如として現はれてゐる。特に信長の反俗的な一面が鮮やかに書いてある。ひたむきな信長が書いてある。戦国乱世の青年公子の苦闘が書いてある。無論、坂口君のことだから、めめめした信長など書きつこない。ちょうど坂口君は、信長を書くのに逃へむきな作家ではないだらうか」と批評。『坂口安吾全集』第16巻(筑摩書房2000)「石井立よりの来簡」註で全文引用され、『井伏鱒二全集』別巻2(筑摩書房2000)に収録	信長
1953年6月	井上靖	坂口安吾著『信長』	紙誌	日本読書新聞(22日)	短篇「織田信長」も「ずば抜けて面白いものだった」が、長篇「信長」も「非常に面白く」「道三と濃姫と信長の関係に於て、少年時代の信長の映像は正確に捉まえられている」とし、「史実には頗る忠実である」点も指摘しつつ「史実と史実との間を縫って氏一流の史観を展開して行く坂口氏の取扱いは頗る見事である。この、信長を取り巻く小野心家たちの権謀術策の戦国地図は、誰が読んでも面白いものである」と絶讃。『坂口安吾研究』Iに収録	織田信長 信長
1953年6月	匿名(天地人)	再び戦列につけ—永遠の求道者坂口安吾	紙誌	朝日新聞(19日)	安吾の行状と著作に相当詳しい匿名子のファルス調コラム記事。桐生市の住居を「足利市」と誤ってはいが、「今一度人間紛乱のド真ん中につけ」というエールが主張の中心。『坂口安吾全集』14(1999)月報に収録	
1953年7月	花田清輝・武田泰淳・中村光夫	創作合評—中庸	紙誌	群像	匿名小説として発表された「中庸」について、武田が「ユーモア小説風」だが、異常な人物たちによって「常識的な論理がぶちこわされてしまう。そのおもしろさというか気持ちの悪さというのがテーマ」で、安吾の小説によく似ていると見抜く。花田は「なんだか気の抜けた小説」とし、「作中人物がちょっともストラグルを起さない。リアリズム小説を止揚してゆくというよりも、そういう粘り強い現実との対決をむしる避けているのじゃないか」と批判。『創作合評3』(講談社1970)、『坂口安吾研究』Iに収録	中庸
1953年8月	無署名	坂口安吾氏の酔虎伝—桐生市で喫茶店に乱入	紙誌	毎日新聞(20日夕)	「桐生市本町二丁目作家坂口安吾氏(四六)は二十日午前五時半ごろで酔のあげく「起きろ、起きろ」と同市泉町喫茶店パリスこと中村千代子さん(三二)方の表ガラス戸を破壊したので、桐生市署員がこれを取りおさえ同署に保護した。同氏は前夜の十九日夜十時ごろにも同店で飲酒、一たん帰宅したが、同氏の夫人三千代さん(三一)に乱暴を働こうとしたので、夫人は付近の高木医院へ避難する問題もあった」という記事。『評伝坂口安吾』に全文引用	
1953年8月	無署名	坂口安吾 暴れる	紙誌	朝日新聞(20日夕)	毎日新聞の同日夕刊と同じ事件をごく短く報じたもの。「パリスの玄関ガラス二枚を割って騒いでいる」安吾を留置し、「同日午後一時すぎ釈放した」とある	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1953年12月	臼井吉見・平野謙・高橋義孝・十返肇	今年の問題作を語る—信長について〔座談会〕	紙誌	文學界	「信長」について、高橋が安吾独自の解釈を「野放図」に打ち出していると批評	信長
1953年12月	臼井吉見・本多秋五・中島健蔵	創作合評—幽霊それから	紙誌	群像	「幽霊それから」について、中島は「牧野信一あたりと一緒にガタガタやっていた時代の坂口が再び出て来たように思う」が、「もっとほんとうにユーモラスなものになってくれれば成長がある」と評価には含みをもたせ、臼井は作中人物に安吾の生身が投影されすぎており、「もっと蒸溜さしてもらわないと、ユーモラスな味など出るはずがない」と批判。本多は「常識というものを一つ一つあざわらっている、そういう童話だというふうに思いました」と述べ、安吾の近作の中では「調子が張っていて」「出来がいい」、「ぼくは愉快でしたがね」と一人だけ評価。『創作合評4』（講談社 1970）、『坂口安吾研究』I に収録	幽霊それから
1953年12月	尾崎一雄	暮のはなし—文人困碁界を中心に	紙誌	小説新潮	1939年2月5日、文人困碁会で尾崎一雄ら上野砂子屋チームは、安吾、野上彰、豊島与志雄ら本郷チームと対戦したが惨敗したと悔しそうに綴る。これに先立って、安吾から挑戦状が届いた話とその全文面が写されている。文面は『坂口安吾全集』16(筑摩書房 2000)に尾崎一雄宛書簡として収録	
1953年12月	無署名	お蔵で眠る『安吾捕物帖』	紙誌	朝日新聞(15日)	著者に無断で事前に印税差押えが決まってしまった『安吾捕物帖』第3集に、安吾が検印を拒んで八カ月がたったという記事。記事本文と末尾の「坂口安吾氏の話」とで明らかな食い違いがある。『評伝坂口安吾』に引用あり	明治開化安吾捕物
1954年1月	花田清輝	戯作の系譜	共著	岩波講座『文学』4(岩波書店刊)	シェイクスピアの描く、辛辣な道化(Bitter Fool)悪賢い道化(Sly Fool)愚鈍な道化(Dry Fool)を順に、荷風・石川淳・安吾になぞらえ、道化の退化にみえて実は進化である様相を説く。通人にして暫間に転落することはない荷風を批判する安吾、その荷風論にほぼ賛同してみせ、安吾は「荷風とは反対に、自分の芸術の品位を江戸戯作者のなした程度まで“引上げたい”とおもっているのかもしれない」と分析。「愚鈍な道化のように、嬉々として、無価値の世界のなかで、たわむれているかのような安吾のファルス精神は、戦時中の「日本文化私観」にもはっきり表れている」と読む。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	通俗作家荷風 日本文化私観
1954年2月	佐々木基一	戦後文学の諸相	共著	岩波講座『文学』5(岩波書店刊)	石川淳や安吾について「混乱のなかをつらぬいて生きることそのことにモラルを求めようとしている」とし、「保守的な道徳家と進歩的な啓蒙家が数多く輩出した戦後」にあっては「ニヒリスティックな逆説的モラル」が必要であったと説く。「新戯作派」の各作家それぞれ個性が違うが「するどい自意識、実体的自我の解体、ニヒリズム、素朴リアリズムからの脱却、烈しい反俗の精神、一種無政府主義的な心情などを共有している」と分析。『佐々木基一全集』II(河出書房新社 2013)に収録	墮落論
1954年2月	中島河太郎	解説	解説	不連続殺人事件〈春陽文庫・日本探偵小説全集9〉	乱歩の「不連続殺人事件」評(1948年)に全面的賛意を示す。純文学畑から本格推理長篇で登場したことは「わが国探偵小説史上特筆大書すべきこと」で「技倆は卓抜であつた」が、「関係者の殆んどが異常性格者に近いために、殺人者の恐怖戦慄が読者に直接迫らないのが難点ともいえよう」と論評	不連続殺人事件
1954年2月	江戸川乱歩	坂口君の探偵小説	解説	不連続殺人事件〈春陽文庫・日本探偵小説全集9〉	「一般文壇と探偵小説」(1947年)の抜粋	
1954年3月	十返肇	廣の季節	単著	(大日本雄弁会講談社刊)	「墮落論是非」の章でおきまりの安吾批判を展開。1948年11月の安吾論とあまり変わらず、戦争を「壮大な見世物」と書いた部分などを「人間にたいする侮蔑」「冒瀆」となじるのは、1947年9月の岩上順一の論文と同じ。未亡人の恋愛をなぜ墮落とよぶのか、と逆読みして批判するのは、1947年5月の洪川驥「墮落論解説」と同じ。左派へのすりより、というよりバクりに近いもの。十返肇『文壇』の崩壊(講談社文芸文庫 2016)に抄録	墮落論 散る日本
1954年4月	花田清輝	坂口安吾著「夜長姫と耳男」「信長」	紙誌	近代文学	書評欄だが、1953年の匿名批評「一流の人」ですでに「信長」を褒め上げたので、あまり書くことがないと言評せず。1952年秋に中野重治と共に桐生の坂口家を訪ねた話を書いている。巨大なコリー犬が始終3人のまわりを歩き回るので背筋が凍り、座談会は安吾の独演になってしまった、と	
1954年4月	高木卓	坂口安吾—歴史小説の戯画的な手法—「信長」	紙誌	文芸日本	「信長」について、相当に史実に忠実である点を評価しつつ、史実を入れ込み過ぎて読者はついていけないと不満も述べる。「作家的また歴史的直観が、作品中の人物の人間性創造にもすばらしい効果をあげると評価し、その創造に一役買ったのは「漫才まじりの戯画的な手法」によるとする。ただし、この手法ゆえに「内的な高さを見おとされる懸念も多分にある」と、盾の両面を見る批評。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾選集』5(講談社 1982)に収録	信長
1954年8月	安岡章太郎	坂口安吾の生活と意見—作家の見た作家	紙誌	文學界	安吾のエッセイ「ゴルフと「悪い仲間」」を冒頭に置いた、安岡の桐生訪問記。安吾は「少年のために、従来型のまったく破つた」猿飛佐助の小説を構想していたといい、そのプランを聞いた安岡は「もう怒ち、古代の息がき、山奥の風が吹きとほってくるやうだ」と感じている。『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』に収録	ゴルフと「悪い仲間」
1954年8月	無署名	芥川賞に批判の声高まる—坂口安吾氏委員を辞退	紙誌	時事新報(7日)	安吾が芥川賞選考委員を辞めたことについて、さまざまな憶測が飛んでいるという記事。選考委員間の意見対立のせいとする見方に傾いた内容だが、これも憶測の域を出ない	
1954年8月	無署名	安吾氏伊香保でくつろぐ	紙誌	毎日新聞(7日)	8月3日から6日まで伊香保温泉金太夫旅館に宿泊し、「伊香保は初めてだがこんな涼しいところは知らず驚いた。すぐ帰るが今月中にまた来たいと思っている」と語る。「太田市のゴルフ場でカービン銃ギャング大津に間違えられて閉口したこと」など話したという	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1954年8月	山室静	文芸時評—つまらない丹羽と坂口の“力作”	紙誌	日本読書新聞(30日)	「裏切り」について「だからだした叙述に閉口」して途中で読むのをやめたと全否定	裏切り
1954年9月	福田恒存	坂口安吾	解説	現代日本文学全集49(筑摩書房刊)	銀座出版社版『坂口安吾選集』解説8篇(1948)の再録	
1954年9月	平野謙	解説	解説	現代日本文学全集49(筑摩書房刊)	「白痴」について、同時代でやや批判的に評したのを一転させて高く評価、「戦争の悲惨といふやうなありふれた視角」でなく「戦争と遊び戯れているような」「不思議に健全な」一瞬一瞬のいのちみたいな充実感が、かへって全体の虚無感をうかびあがらせるのに成功してゐる」と論評。「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」については、孤独や無邪気なもののむごたらしい恐ろしさをこのように「無飾の手法で作品化した人は、それまでほとんどゐない」とし、安吾文学は「一種の観念文学であり」「観念を背負はされた裸身の人間と人間とがいはば無媒介にぶつかりあふ劇、そこに坂口独自の文学的性格がある」と批評。平野の安吾評の集大成といった趣がある	白痴 桜の森の満開の下 夜長姫と耳男
1954年9月	渡辺彰(編)	坂口安吾年譜	解説	現代日本文学全集49(筑摩書房刊)	安吾生前に編まれた唯一の年譜。秘書役だった渡辺彰がまとめた労作で、安吾本人の目にも触れているはずだが、誤りや誇張も少なくない。自伝的小説から恣意的に言葉を変えて引用しているせいで、幼稚園には「殆んど登園せず」、中学も「殆んど学校へ行かず」とされ、当時邦訳の出でなかったバルザック作品を読み、『改造』懸賞創作の募集が始まる2年も前に応募したと断定されている。以後、誤伝は長く伝承されることになる	
1954年9月	檀一雄	淳、安吾、治、覚え書	月報	現代日本文学全集49(筑摩書房刊)	3人の作家への最大限の敬愛を綴る。安吾については「思考と文体の一切から、まぎらばしい無用の装飾をかなぐり捨てた。裸形の文体に、前ノメリの裸形の生命をのせてみたのである」と述べ、さらに「実行は過激である。その誠実が一瞬の躊躇をも許さないからだ」と批評。檀一雄『太幸と安吾』(虎見書房 1968、角川ソフィア文庫 2016)に収録	
1954年9月	大井広介	その頃の坂口	月報	現代日本文学全集49(筑摩書房刊)	『現代文学』同人に引き入れた話に始まり、酔えば語彙が減少し最大限な形容詞ばかりになる話、貧乏でも気位だけは殿様で、ほしい本があると弟子たちに探させた話、平野謙と古谷綱武の一方が他方を逆かした話が後日逆になっていたが、同じことじゃないかと平然としていた話など、各種エピソードを紹介。歴史の本や探偵小説ばかり読み、文学書はあまり読まなかったが、ドストエフスキーだけは愛読し「人間に深淵のあること、殺すと愛すといふ極致の一致する場合、ジキールがハイドリうることなどを、理解していたという。『花妖』を「彼の最もハリのある作品で、其後の彼の全作品の要素をふくんでゐる」と評価。大井広介『バカのつっぽろ』(近代生活社 1957)に「殿さまのような安吾」と改題されて収録、『坂口安吾全集』4(1998)月報に原題で収録	花妖
1954年10月	花田清輝	文芸時評	紙誌	新日本文学	「裏切り」について「快活な戯作調をとりもどし、セキをきってハンランしはじめた」とし、「現在、ドストエフスキー流の観念小説をかこうとおもうなら、ぜったいに、この作品にみいだされるような、軽い、無造作なさりげない調子が必要だ」と評価	裏切り
1954年10月	坂口献吉	坂口家の系図について	付録冊子	『五峰余影』増補版	1929年に初版が刊行された『五峰余影』の再刊付録。江戸時代初めごろ坂口家の先祖が肥前唐津から加賀、越後へと移住して来た来歴や、本家が巨大な資産家であったことなどが記されている。『坂口安吾全集』別巻に収録	
1954年10月	無署名	坂口安吾氏父翁の法要に帰省 [インタビュー記事]	紙誌	新潟日報(3日夕)	仁一郎の三十三回忌で新潟に帰省した折、法要前の10月1日のインタビュー記事。「なつかしいね。どこに住んでいたつてやはり心の底には故郷の土の匂いがこびりついているものだよ」と述べ、お焼きやいちじく湯など昔食べたものを思い出していたとある	
1954年11月	無署名	秋田犬 復古調の波に乗る—文化財その後1	紙誌	朝日新聞・秋田版(16日)	「安吾の新日本地理」秋田の巻で、「秋田犬ウスバカ説」を書かれたことに不興を示す内容だが、秋田犬の権威平泉栄吉方で安吾が書いた色紙「秋田犬によす」の書影も掲載されている。この色紙は『坂口安吾全集』16に写真収録された	安吾の新日本地理
1955年1月	無署名	風の音さくお正月 坂口安吾 [インタビュー記事]	紙誌	読売新聞(5日)	1歳の長男綱男ちゃんを抱きあげた近影とともに「これは桐生高校に入れて野球部の投手にする」と言い、「桐生のこすからさと非人情な点が気に入った」と語る。題字も安吾の筆	
1955年1月	横山泰三	坂口安吾—滞納や中毒に耐える酔霊獣	紙誌	日本経済新聞(8日)	横山隆一・泰三兄弟が戦後の新橋カストリ横丁の「凡十」で安吾と出逢い、その足で安吾宅まで連れて行かれカストリを飲みながら語り合った話。隆一が洋服の下にパジャマを着ていた用意周到さに安吾が舌を巻いたとか。『坂口安吾全集』16(1999)月報に収録	
1955年2月	北原武夫	世に出るまで	紙誌	小説新潮	1931年頃、同人雑誌仲間の中でも「坂口安吾、田村泰次郎、山下三郎の三人の名は特に一頭地を抜」いていたといい、創作には暗中模索で女と同棲中だった北原を安吾が訪ねて来て、「おい、君にはもう芸術は沢山だ、人生をもつと勉強しろ、君に大切なのは人生だよ！」とウイスキーと一緒に飲みながら忠告してくれたという	
1955年2月	無署名	作家故郷に行く 新潟県・坂口安吾氏	紙誌	小説新潮	1954年11月に安吾が新潟へ帰省した折の写真紀行。撮影は濱谷浩。巻頭グラビアで各写真のキャプションは安吾自身が付けたものとみられる。『坂口安吾全集』別巻(筑摩書房 2012)に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	所収刊本・紙誌	内容・備考	主な言及作品
1955年2月	福永武彦	気の弱い文芸時評	紙誌	文芸	石川淳「前身」を「内的リアリズムの作品」として高く評価し、安吾の「狂人遺書」にはそれが薄いとみる。「第三人称で、もう少し離れて書けなかつたものだらうか」と苦言を呈す	狂人遺書
1955年2月	平野謙	解説	解説	昭和文学全集53 (角川書店刊)	1954年9月の「解説」同様、ここでも賞讃する方向へ転じている。「白痴」については、「戦争の巨大な破壊作用のもとに生きる瓦礫のやうな人間の実存的状況を描くことによつて、戦後社会の虚無と頹廢にひとつの力づよい焦点を集約することとなり、多大の反響をよびましたのである」として、「冒頭の主人公の住む町内の描写がたいへん精確なことが分かる。人間もけだものも区別のない乱倫の生活状況は、戦時中よりむしろ戦後のものである。白痴の女主人公はそれだけものにひとしい人間群の象徴にほかならない。その肉慾だけに生きる白痴の女をいだいて、主人公はボウボウたる曠野をさまよふ孤独感に陥る。その曠野をさまよふ孤独感が、具体的には凄惨な空襲の炎をかいくぐつて逃げまどふ主人公のすがたに形象化されてゐるところに、この作品の迫真的なリアリティがある」と評価。「墮落論」については、戦時中の「日本文化私観」「青春論」とつながる「虚無感と合理主義との奇妙な結晶体」と論じ、敗戦によって、戦時下では顧みられなかつた「その独創的な発想法に共感する社会的地盤が一夜にして忽然と用意されたといつてもいい」と述べる	白痴 墮落論 日本文化私観 青春論
1955年2月	神西清・中村真一郎	小説診断—狂人遺書	紙誌	文學界	「狂人遺書」について、神西が歴史上の偉人たちを「片っぱしから卑小化して書く」やり方は新しくもなく、さらに「秀吉に作者が転化したんならいいけれども、逆に秀吉を作者のほうへ転化させている」と批判。それに対して中村は「歴史的な一つの事実を既知の、都合のいいシチュエーションに使う、ある心的傾向の個人のパッションの病理学的な研究をしたと云うものでしょう」と別の読み方を示す反面、「心理的分析をもっと細かくデリケートにやってほしかつたと思うんです。これでは、芸術的にいえば、まだコクが足りない」と批判	狂人遺書

〈発表媒体の略称〉  
 単著→一人の著者による単行本  
 共著→複数の著者による単行本に収録  
 紙誌→雑誌・新聞・大学紀要・機関紙等に掲載  
 解説→作品集・全集・選集の解説や解題  
 月報→作品集・全集・選集の付録

〈参照資料一覧〉  
 『坂口安吾全集』各巻解題(1998~2012 筑摩書房)、関井光男編「研究文献目録一覧」(1973.5.31 冬樹社『坂口安吾研究Ⅱ』所収)、荻久保泰幸・島田昭男・矢島道弘編『坂口安吾事典【作品編】』(2001.9.15 至文堂『国文学 解釈と鑑賞』別冊)、国立国会図書館&新潟市立図書館キーワード検索システム等